

# 第1代 北九州大学応援団の黎明

団長 齋藤 哲哉

はじめに

応援団結成五十年にあたり、継承されるであろう同団の発祥期の経緯を綴る機会を与えて戴いた方々に深甚の敬意を表します。後にして思えば、その内容は、まさに総合学ならざるを得ない経緯があり、史実ゆえに導入部をしたためただけでも、許された紙数の数十倍を要すると思われまします。

従って、当時の一期生、二期生が存命の内、ぜひ先達と語り合う機会を得、エキスを効率的に吸収される事を熱望してやみません。

記

それは興るべくして興きたのである。それまでのあらゆる価値観が崩壊し、「自由」を取り込み、おのれを失わず生きていく為に、律、志、敬、自制を肝に据えた自身の再構築を覚悟しなければならぬ時代になったのである。この価値観の振幅と変容は、當時予想し現在も継続している事を考えると、「心の依り処」として青年志士の集合体の必要性が勃興したのである。敗戦から自立、国威昂揚から国際社会での地位向上へと、現在

では考えられない速度で、国家水準での脱皮が要求されていたのである。その象徴的動向のひとつとしてスポーツが存在し、それは平和国家へ健全に誘導する政策をも意味したのである。

必然的に、「新時代の応援団」希求の一因となったのである。小生は、一柔道部員であったが、プロ野球の三原監督率いる野武士集団西鉄ライオンズが好きであった事も有り、九州随一の強打者「ホームランの泊」のいた野球部は、九州地区でも上位にあったが、応援の粗末さはひどく、東京六大学のスマートなそれに較べるとあまりにも格差が有り、応援も団としての体裁をなしておらず、恥ずかしく苦々しい思いだけが先に立っていたのである。

応援団創設のためのコアとファンダメンタルが揃いつつあったが、初動は、学内を固めて全九州結成というより、世の趨勢という背景に外から内へと固める方法をとった。コンセンサスを得るエネルギーと時間は筆舌に尽くし難く、すでに鬼籍に入られた諸先生、同輩の尽力の血涙を、紙数の制約で語れないのが痛恨の極みである。

「豪快優美」

結成の精神基盤である。時として虚勢的暴力を質実剛健とカン違いした蛮カラ無類集団

## 第2代 想うこと

団長 伊藤 博視

創部当時の応援団は、北九州大学の歴史と、あらゆる面で似通っている。現在のような立派な校舎はどこにもなく、体育館とは名ばかり、雨が降れば傘が必要だったし、学ぶべき教室は旧陸軍の兵舎であり、倉庫を改装したものであった。応援団もまさに初期の北九大そのもの、全てが出来たばかりで、多くの善意にすぎり、団旗、太鼓と揃っていった。

しかし、団員の数は、今日のようなことはなかった。当時、常に十五名位はいたし、皆個性豊かな猛者ばかりであった。男臭く、女気は更々なく、平和台球場に行くのに、満員電車に太鼓や旗を持ちこんで、国鉄職員の苦情を賜り、ついには運転席に乘せられたこともあった。今のJRとは隔世の感がある。

エピソードには事欠かない。語れば原稿用紙二枚で済む類のものではない。この際、その数々を整理しておきたいと思う。

齋藤初代団長について一言。団を創り、五十年近く続いている現状を考えると、その功は計り知れない。現役諸君も、この偉大な先輩を今後とも語り継いで欲しいものである。昭和三十五年、当時あたかも安保騒乱の最

とは、明確に一線を画したのである。もともと具有している小倉の風土である「文武両道」、「野にして卑ならず」を象徴的に表現したもので、永続的な統一のためにふさわしい礎を据えたと思っている。「豪快優美」は鈍直、剛直、宏量、闊達、堅志を基礎とする優美である。この精神が当時とは大きく変容を遂げた現代も尚、瑞々しく新鮮で、四十数年前に語り合った構想が開花している事実は驚くばかりであり、歴代の部員諸兄弟の努力を思い感銘を受ける。

「創立の作業は刹那であったが、想いは萬感である」



ボクシング部応援のため愛媛大学に遠征（左から、ボクシング部・窪田信久、松本宏斉。松山市内にて）

中、我が野球部が九州六大学代表として神宮球場に赴いた。平成十六年にも出場し、当時が懐しく思い出される。一回戦で神奈川大学に敗れたが、丁度我々が東京に着いた夜、安保闘争の最中に東京大学の女子学生が亡くなった。半世紀前のことである。

現在の団員諸君に当時の我々の生活、活動、勉学を話しても到底信じ難いであろう。いつの日か話が出来たらなあと思う。

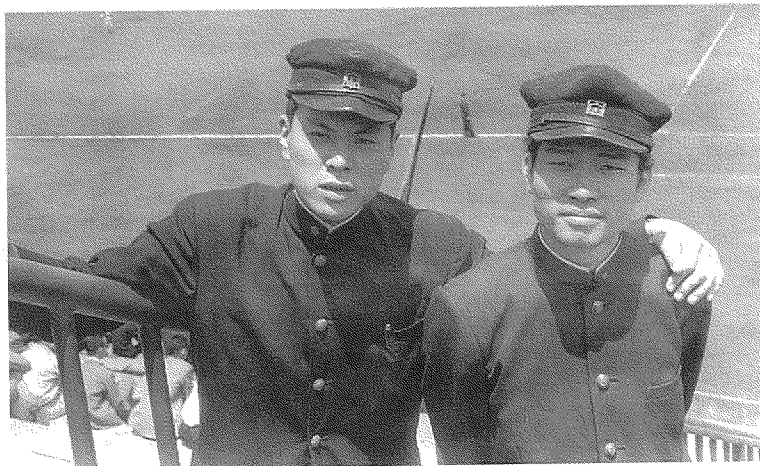
魚町から小さなチンチン電車で終点・北九州大学前で降り、そこから一日が始まる。下駄ばきの輩もいる。Gパンなんてありはしない。女学生は数えるほど、色気も素っ気もない。齋藤先輩以下の当時のメンバーが今の北九州市立大学にそのまま横滑りしたら、やっぱり五十年前と同じバターンの毎日を繰り返していたらどうか。五十年は、それほど遠い。願わくば、更に応援団員の数が増え、栄々と歴史を刻んでいって欲しい。どうか、私の孫にも等しい現在の団員諸君の一層の奮励、努力を切望し、北九州市立大学応援団の発展を祈念しております。

最後に、当時応援団の誰もが世話になった生島先生、石原学長に合掌。

更に、私が団長の時、心から支えてくれた初代・渡辺さん、二代・福嶋さん、三代団長・上田さんに深甚の謝意を表したいと思いま

す。四代。坂口団長、初代・矢野さんが鬼籍に入られたことに、心から御冥福をお祈りします。諸兄弟の御心配、御苦勞に感謝しております。

さあ 玄海に向かって 押忍



左から、伊藤博視、田中至功（昭和35年、神宮球場）

第3代

青春謳歌

団長 上田 則文

私は昭和三十三年に入学した。学舎はまだ旧日本軍の兵舎跡を利用してしたが、物資もそれなりに揃い、日常の生活にも困らず、伸び伸びと学生生活を謳歌した。

それまで地元の大学受験生は東京や関西方面に進んでいたが、北九大の評価が高まり、受験生も多くなってきた。学内ではスポーツが盛んで、柔道、空手、ラグビーなどは部員数も多く、活気に満ち溢れていた。

その中でも特筆すべきは野球部で、九州六大学リーグで優勝して神宮球場での全国大会へ出場するなど、大活躍であった。ホームラン王の泊氏はプロに注目され、陸上部の堀ノ内氏は九州駅伝の常連選手、重量挙げ部の萩尾氏はアジア大会に出場するなど、有能な選手がいた。

私は二年生になって入団したが、初代団長の齋藤哲哉氏が自宅のそばに住んでおられたので、一年生の頃から大体の雰囲気はのみにめていた。

当時の団員（特に初代）は血気盛んで、チンピラ連中も彼らの姿を見ると道をあけるほど、一目置かれた猛者揃いだった。

すでに同期の蓮尾義輝君（父上の関係で、戦後最大の労使闘争「三池闘争」に参加）と下級生の坂口晃二君（平成十一年に他界）が入団していた。私の後に西村隆君（会社経営）や野中茂光君（元北九州市役所部長）が入団した。

三年生になって頭を痛めたのは、いかに団員を増やすかだった。母校からの受験生に「入学すれば即入団」の約束をとりつけ、新入生を勧誘し、約十五名を入団させた。最初はおとなしいふりをして連中も、時がたつと個性を発揮し出す。

秋には野球部が「九六リーグ」で優勝し、全国大会出場。応援団も二代団長・伊藤博視氏のもと神宮へ。神奈川大に敗れ、初戦突破はならなかったが、我々は、当時小倉市市長だった林信雄氏と共に、市議会議員である私の祖父・上田鮎之助より寄贈の「小倉の祇園太鼓」を叩くなどして意気軒昂に九州男児の心意気を見せた。

スタンドでちよつと面白い現象が起きた。どう見ても本学とは無関係のかなりの数の学生が、一緒に応援をしてくれているではないか。聞くと、彼らはいずれも九州出身だという。「同郷のよしみで応援したくなった」と聞き、感激した。

団長就任後は、「団則・団律」を創りなお

第4代

四代目団長・坂口晃二君のこと

第三代 上田 則文

本来ならば坂口君に執筆をお願いすべきところだが、平成十一年七月に他界されているので、私に分かる範囲で述べさせていただきます。

大牟田南高校出身で、豪放磊落、声も大きく、応援団の申し子のような男だった。三年の二学期になると、その頃、九州のどの応援団も着ていなかった「羽織袴姿」で現れる。その姿が歴代の団長へと継承され、北九大応援団の伝統となっている。

彼の奥さんによると、社会に出てもその信念は変わらず、意見の違う上司にはくつてかかったらしいが、一年上の私に対しては一目置いて一切逆らわなかったことが、不思議でならなかったという。

暇を閉じると、長髪で黒縁メガネの彼が、「やー先輩！」と、今にも現れそうな気がしてならない。長生きしてもらい、時々一献傾けたかった。

在学中に接した先輩や後輩で、すでに鬼籍に入った仲間には、坂口君以外で、矢野晃治氏（初代）、田中至功氏（二代）、向門璋人氏（五代）、永岡啓征氏（五代）、中山悦定氏（六代）などがある。一人一人、強烈な思い



九州インカレ（昭和36年7月、熊本）

出が甦ってくるが、字数の都合上省略せざるを得ないのは断腸の思いである。しかし、一人だけは、どうしても思い出を語らせていただきたい。矢野晃治先輩のことである。性格は温厚で誰にでも好かれ、人望の厚い方だった。先輩とは社会人になってからも交友関係が続き、私の人生で「大波」があった時は、我が事のように心配してくれた。奥さんによると、酒を飲むたびに「自分の力不足



第3代目幹部送別会

で上田を助けることが出来なかった」と言っでは、何度も涙を流されたらしい。五十四歳でこの世を去ってしまった。応援団OB代表として弔事を讀ませていただいたが、わずかな時間では先輩の生前の人柄を述べることが出来ず、いまだに悔いが残ってならない。坂口君、矢野先輩を含め、皆様方のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

した。まず、「押し忍」の返事を、団室の出入りを含めたすべての挨拶に取り入れた。厳しい上下関係をはっきりさせる意味から、目上に対しては「先輩」と呼ばせるようにした。最初は不自然さがあったが、慣れると皆人格が変わったようにしゃきつとしてきた。次にブラスバンド部の統合である。ブラスバンド部は、応援団内の一組織として誕生したが、いつからか「吹奏学部」として独自の道を歩んでいた。初代部長の生島宏一先生に相談し、ブラスバンド部を説得、応援活動を主とし、余暇で吹奏楽の演奏をするものとした。

初代部長・生島宏一先生については思い出が多い。早稲田大学出身の先生は、体は小柄だったが声が大変大きく、いつもニコニコしていて面見のよい、信頼厚い素晴らしい人物だった。私自身、卒業後も個人的に相談のついでにいただいたことは、生涯忘れないだろう。行橋・箕島での合宿では、合宿責任者の西村隆君のもと、リーダー部長・坂口君の精力的な指導で、三泊四日、朝早くから夜遅くまでくたくたになるまで練習した。終了後は、一段とたくましくなったように感じた。いずれもよい思い出であり、応援団で過ごした学生生活を、今でも誇りに思っている。

## 第5代 現役時代の思い出

団長 藤本 勲

北九州市立大学応援団創団五十年史がこのほど出版されますこと、誠にめでとうございます。出版にご尽力されました上田則文実行委員長はじめ関係各位に敬意を表します。

小生は第五代目団長（昭和三十八年四月―昭和三十九年三月）を担当いたしました。この時代は、部員が二十名位だったと記憶しています。

小生の出身は山口県厚狭郡楠町大字東吉部という田舎で、周囲は山々と段々畑でしたので、小倉へ下宿した時は大都会に思われ、右往左往したことを覚えています。

さて、小生が応援団に籍を置くことになったきっかけは、まず、入学式の折、各サークルの部員募集の勧誘の中で、制服・制帽姿で全員が整列して「オッス！」と声を上げるやたら目立つ一団がおり興味をひかれたこと、小生は高校時代に空手を少し習っていて、やや硬派の気質を気取っていたことなどが挙げられます。それと、何ととっても最大のきっかけは、第三代団長・上田則文氏の容姿でした（こんなことを書くとは叱られますが、今から四十年近い前のこととお許しを

乞う）。

小生も身体はそれほど大きい方ではありませんでしたが、それにも増して小柄で童顔、その人が団長だというではありませんか（後日わかったことですが、大変な猛者でした）。「どうだ、縁の下の力持ちになってみないか？」。その誘いについてい乗せられ、入部に至った次第です。

入部したのはよいが、練習は苛酷で、普通は海に向かって発声するのが常識ですが、応援団は違いました。海の中へ入り、一〇〇メートルも行った所から、岸に向かって発声練習をさせられるのです。声が小さいと何回も声が届くまでしごかれました。おかげで、この歳になって声帯はつぶれ、「カラオケ」でなんて歌えっこありません……。

小生が団長になった際、何か後世に残したいと考え、空手を工夫して、三三七拍子で型を作りました。今も演武で継承されていると確信しています。

小生も平成十六年で六十三歳になりました。今は石川県で運輸倉庫業を営んでいます。ここまで頑張ってきたのは、一重に応援団で培われた精神の賜物と感謝しております。

後輩諸君、今後のさらなる活躍を祈ってやみません。

福無量



第4代目幹部送別会（昭和37年12月13日）

## 第6代 近畿大学応援団視察

加藤 祐治

本来ならば団長の中山氏が執筆すべきところだが、平成十二年十二月に他界されているので、私が代筆させていただいた。

なにしろ四十年前のことだから、小生の記憶も定かではないかもしれないが、確か昭和三十八年の五、六月のことだったと思う。

「我が応援団を、より応援団らしくしようじゃないか」という、中山氏の発案で、近畿大学応援団に視察研修に行くことになった。その間の近大側との交渉などには全く関知していなかったが、とにもかくにもそういう話が決まり、上阪することとなった。

団長・中山氏、副団長・木村氏と共に、私は書記という肩書きで近大応援団を訪問した。中山団長は、ひげ面、羽織袴、高下駄に木剣といういでたちであった。さすがの近大応援団も、その風体に度肝を抜かれたようだった。木村氏と小生は、学生服姿だったような気がする。一応お互いの幹部の自己紹介があり、早速練習を見学した。

約三千名位の団員が、団長、リーダーの号令のもと、整然と一糸乱れぬ姿で練習する様子に、目を見張って見学した記憶がある。



熊本遠征時の中山悦定（左。当時1回生）と藤本勲（同2回生）

こういう流れの中から、八幡大学との応援合戦とか演武会というような行事が生まれていったと思っている。

当時の中山氏や木村氏は堂々としていて、本場に頼もしかった。それにくらべ小生などは、「刺身のつま」みたいな存在であったと思う。

今、こうして創団五十周年記念誌に寄稿している自分に、天界から中山氏が大きな声で「しっかりしろよ」と激を飛ばしながら、見

守ってくれているような気がする。

木村氏は体調不良とのこと。郷田氏とは四十五周年の総会の時に再会したが、彼も事故の後遺症に苦しんでいる様子であった。小生も持病と闘いながら毎日を過ごしている。

本場に四十年前のことが懐しく思い出される。先輩諸兄、後輩諸君のご健勝を祈り、実行委員の方々に、この場を借りて深く御礼申し上げます。



左から、第3代・上田則文、第5代・林清三郎、第6代・中山悦定（昭和35年、神宮球場）

## 第7代 二つの課題

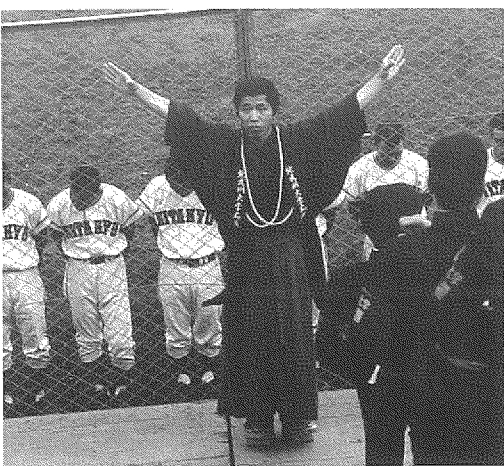
団長 永竹勝

応援団も七代目を迎え、質・量という基準でみると、量的（団員数）にはある程度満足できるものとなっていました。もう一方の質的な面では、初代の草創期から諸先輩が築きあげてこられた応援団としての礎を更に満足度の高いものにするための二つの課題を設定し、一年間取り組みました。その成果についてはほぼ満足できるもので、合格点と自負しています。それも、七代目幹部八名の理解と協力をあわせ、団員全員の力が結集された結果であり、この場をかりてお礼申し上げます。設定した課題の一つが「演武の確立」でした。これについて大きく影響を受けたのは、毎年十一月に大阪府立体育館で開催される「全国大学相撲選手権大会」です。相撲と応援、普通に考えれば何ら関係ないことですが、この大会は、参加大学の応援団の演武会でもあるのです。

各大学がオリジナルの演武を披露されるのですが、東の日大、西の近大といわれるだけに、両大学は質・量ともに他を圧倒するものがありました。しかし、それ以上に感動を覚えたのが、この二校以外の大学です。おのお

の大学のカラーにあわせた演武を持ち、その中でも特に東京農大の「大根踊り（青山ほとり）」というユニークな演武には大変驚き、感動し、我が北九大においても何か独創性豊かな演武をと、皆がその思いを強くしました。その後の活動の中で「新奇性、独創性のある演武」を念頭に取り組み、後の「第一応援歌」、「北九節」につながっていきました。もう一つの課題は、「応援団の認知」ということでした。創団から七年、学生はもとより地域の方々にも、その存在はある程度認知されていましたが、「応援団II 恐い」というイメージが当時の一般的な受け止め方ではなかったかと思えます。応援団の活動の基本は大学および本学生の精神的な支えとなることであり、大学を代表して出場されている学生に持っている力を存分に発揮していただければ、応援団員としてこれ以上の喜びはありません。

そのようなことを常に願い、応援団を理解し、認知していただくため、数多くの大学の行事に参加、あわせて応援団主催で「応援団と共に」を開催しました。これは、応援団にとっての将来のサポーターを増やしていくことにつながったと思われます。同時に、団員の獲得にも貢献できました。更に、「演武の確立」の面でも、その披露の場として有意義



神宮応援（昭和40年6月）

合掌

なものとなりました。皆さんの前で行うことで演武にも一段と磨きがかかり、「応援団と共に」が二つの目的を達成するためにもたらした効果は、大変大きかったということになります。以上のように、一年間の活動はそれなりに苦労も多かったものの、野球部が全国大会出場ということもあり、神宮球場でその演武を披露できたのは、我々にとって、その努力が報われたということでもありました。最後に、我々の仲間であった中村厚美君が、志半ばで天国へ旅立たれました。あらためて謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## 第8代

### 激動の時

バンカラ集団からインテリ応援団へ

団長 中川晴夫

四年の春はめぐりたり  
四年の秋は去りゆきぬ

学ランに身を包み、この「逍遙歌」の一節を何度謳歌したことだろう。我が八代目は、昭和四十年六月二十六日、第七代目から伝統を継ぐ。だがこの年は、血気ある応援団が全国へ激震を走らせた年でもあった。乱闘事件、下級生へのシゴキ、学内での暴発……マスコミは連日のように大学正応援団をスクープする。「どうするこのルールブックのない集団」。

四十年前の応援団は、自意識を問われる一つの過渡期であったのかもしれない。「バンカラ集団からインテリ応援団へ」。応援団のあるべき姿を皆で考えた、まさに意識改革の時。九州六大学応援団連盟を全九州学生応援団連盟に組織し直したことは、一つの答えであったと思う。他大学との交流を深めるために最初の本部校として尽力したことは、今でも鮮明に覚えている。連盟バッジ作成を手がけたこともよい思い出だ。

その年七月十三・十七日、夏季九州インカ

レが地元北九州市で始まる。あの炎天下、学ラン姿での応援。苦しくもさわやかな思い出として、生涯忘れることはないだろう。

翌年、六月十二日に開催される「応援団と軽音楽の集い」に向けての合宿を、福岡県大平村にてリーダー部四十五名で行った。当時最も話題性のあるこの応援団に、TNCテレビの密着取材が入り、我が応援団は初めてテレビで紹介される。「シゴキは覚悟しています、北九大応援団」。それは偏見しかなかった大学応援団に、新鮮な息吹と共感を与え、この上ない反響があった。そして演武会当日、上田副団長の華麗なリーダーで幕を開けた小倉市民会館は多くの市民の方々で埋め尽され、大成功のうちに終わることとなる。

応援の型も第六代目より演武の型が始まり、八代目ではほぼ完成されたのではないかと思う。無論、諸先輩方のご指導があったことは言うまでもない。それからもう一つ、当時応援団より、ブラスバンド部の古見田勝也君を学友会中央執行委員会副委員長に押し上げたことも、忘れ得ぬ思い出となっている。

リーダー部四十五名、ブラスバンド部四十名、総勢八十五名という大所帯を率いた頃が、まるで昨日のことのようにはっきりと脳裏に甦ってくる。

あれから四十年、還暦を迎えた我が八代目



大平村合宿帰りの耶馬溪バス旅行（昭和41年6月）

も、鼓手で脚光を浴びた故人・古屋将武君、ブラスバンド部部长・三浦薫君を除いて、今もなお全員が、応援団魂を持って頑張っている。

## 第9代 九代目の紹介

団長 家永徹也

五十年史の発行にあたり原稿の依頼をいただき、色々思い出して懐しい気分になっています。我々九代目について書かせていただきます。

昭和三十九年、入学し、華の応援団に入団した時のメンバーは、中間、岩谷、内田、宮川、藤、鬼籍に入った濱松と私の七名でした。

一回生の時は皆と同じように扱われ、夏のインカレの時はガクランが汗で塩をふき、暑さでクラクラしながらの団旗や太鼓を持つての移動には閉口したものです。宮川、内田、岩谷はエールを上手に切るのリーダーをや

り、私、中間、濱松は親衛隊で団旗を持ち、太鼓は藤が叩いていました。  
二回生になって丸尾が入団し、同期が八名になりました。後輩が七名入団して団旗、太鼓の運搬をしなくてよくなり、ずいぶん楽になりました。グラウンドで酒盛りしたり、後輩を相手に相撲を取ったりもしました。

三回生になって、新入生が入団し、六月の幹部交代の時期になり、私が九代目の団長に指名されました。中間、岩谷が副団に、濱松が親衛隊長に、宮川がリーダー長に、佐坂

(旧姓・内田)が渉外部長に、藤が統制長に指名され、団を指揮することになりました。

副団を始めとして皆優秀であったので、団長としては何もすることがなく、時々号令を掛けるくらいしか仕事がありませんでした。

団長の時着用していた羽織は九年間使用していて、元来は黒の羽二重であったものが羊羹色に日焼けしており、布も朽ちてひっぱればすぐ破れました。これを着て朴齒の高下駄を履き、乞食坊主のような風体で、北方の学舎より魚町まで行進しました。

夏のインカレは佐賀県だったと思います。炎天下の田んぼ道を二キロほど歩いて水泳部の応援に行くと、選手は一名で恐縮していました。

鹿兒島商科大のお招きで鹿兒島遠征をし、芋焼酎と海賊鍋で歓迎を受けました。演武会もそこそこ上手くやれて、たくさん思い出を作り、十代目へ無事引き継ぐことが出来ました。

最後に、親衛隊長をしていた濱松が四十代で早世したことを残念に思い、ご冥福を祈り終わりにします。

## 第10代 感動、そして感謝

団長 諸留昭夫

五月三十日朝、電話が入る。「新聞見たか、野球部が優勝したぞ!」。紫村君の声がはずむ。北九大、三十九年ぶりの優勝!

三十九年前、昭和四十年の暑い日の香椎球場。福大との決定戦。一回から休むことなき応援。七代目の叱咤の下、声をからし、足を踏ん張り、手を拍ち続けた。勝利の瞬間、「ウオー」という歓喜と興奮! 夢中でポケットから紙吹雪を掴み出し、何度も投げ上げた。疲れも何も吹っ飛んだ。応援の素晴らしさを体感した一瞬であった。

我々十代目は一年次、十四、五名に膨れ上がった。幹部は団の充実のためなら横暴とも思える行動も取る七代目の侍たち。そして大生としての自覚の下、団の脱皮を図った八代目。この先輩たちに出会えたことは十代目の幸せであり、旧来の団として、活動的にも内容的にも、最も充実した時代ではなかったか。

団の衰微の徴候は、文学部ができ、昭和四十二年頃に女学生が溢れて学内の雰囲気が変わってしまったことであろう。しかし、後輩たちの団存続への努力と叡知に敬服する。チ

アリーダー部の創設と育成。最近では女性団

長の誕生と、この団長を支え続けた副団長の精神。現役たちの応援団であり、存続あつてこそそのOB会でありOBの喜びである。その

喜びを与えてくれる現役たちに、経済的に精神的に少しでも支援できればと思う。何せ伝統的に貧乏世帯で、合宿、インカレ、演武会などの度に全員アルバイトだったのだから。

我々十代目で幹部披露を受けたのは、結果的に十一名である。  
富岡稔 別府の産。入団第一号。鼓手として名人芸。四次次学友会副委員長。

諸留昭夫 指宿の産。入団第二号。卒後故郷に帰り根付く。  
紫村博 小倉の産。副団長として十代目を支え、卒後も地元にて現役と常に接し、十代目ばかりでなく多くの先輩後輩との情報網を構築。団への愛情、貢献度はピカ一。感謝!

岡崎成樹 築上中部高。三年次まで在籍。歌手の夢を抱き上京。病にて若くして故人。  
栗山博己 現姓・世良。築上中部高。卒後福岡県警。OB会と絶縁状態。

越原幸治 築上中部高。卒後故郷の役場に奉職。幹部として、また同窓会支部長として活躍中。

白石泰彦 防府の産。十代目一番の成績優秀者。東京在住。

者。東京在住。

神前美治 徳島・池田高。切れ者の新聞記者。年寄りには彼の名に手を合わせる。

横田昭宜 姫路の産。早口の関西弁には敵わない。北九州から千葉へ転勤。

安部道博 大分の産。長身の「遣遥歌」演武はお見事。故郷に帰り事業経営。

中村真人 鳥取の産。最終入団者。演武会パンフやOB会テレカのデザインなどは彼の作品。故郷にて事業経営。



1年生時の10代目メンバー（神宮応援時の宿泊所前にて）



第2回全九州応援団連盟会議（昭和41年6月18日）

第11代

我ら十一代目

団長 野村俊治

創団五十周年記念誌発行、誠におめでとうございます。永い歳月を経て時代は変化しましたが、応援団活動が脈々と受け継がれて現在に至っていることは本当に素晴らしいことであり、卒業生として誇りに思います。

第十一代目を紹介いたします。十一代目は新入生六名でスタートしました。当時は先輩同輩とも、非常に個性豊かでユニークな人間の集まりであったかと思われまします。

振り返ってみますと、毎日の厳しい練習、演武会の開催、春秋の野球の応援、壮行会、インカレの参加など、非常に充実した活動を行っていたと、今は懐しい思い出として残っております。

当時のエピソードを紹介します。初めて佐賀のインカレに参加した一年生の時のことです。非常に暑い夏の日でした。先導の先輩が降車駅を間違えて、猛暑の中、二駅程の長い距離を歩き、会場到着時にはバテてしまったこと。

二つ目は、当時学生闘争が激しい時代で、九州でも佐世保港に米軍船のエンタープライズが入港するという事で闘争が起こり、応

援団など体育会系サークルは体制派として対処したこと。

三つ目は、本学の学生会館で七月に実施した短期合宿の思い出です。深夜に夜間練習を競馬場で行っていましたが、小倉競馬場開催中で、馬が暴れ出すということで競馬場よりクレームがきました。運動場に場所を変えて引き続き練習を再開しましたが、今度は近隣団地の住民より安眠妨害だとのクレームが続き練習を断念しました。

当時は、気楽な学生であったためか、周囲の迷惑を考える余裕もなく、ただ自分たちのことだけを考えて行動していました。今思えば懐しいような、また、愚かな行動をしていったんだと反省もしております。

卒業後、行本君が若くして交通事故で他界したと、林君の所在が不明なことが残念です。自営業の磯部君が地元に残り、他は就職して各地に散らばりましたが、諸氏各々は学生時代に培った体力、気力、精神力をもって行動・実践し、現在も現役で活躍しております。

最後になりますが、北九州市立大学及び北九州市立大学応援団のますますのご発展とご隆盛を祈念申し上げます。

第12代

応援団よ、永遠なれ

団長 塩出和司

創団五十周年の節目にあたり、我々十二代目が当時をいかに生き、いかに感じたかを、おぼろげな記憶のため同期の助けも借りながら代表してここに記す。

「大学時代は、応援団にはじまり、応援団で終わったと言っても過言ではない」(末次) 換言するなら、一、二年生の時は、練習に明け暮れ、辛い毎日であったが、「耐えることが、自分を鍛え、精神力の強化につながる」と信じていた(末次)。

この過酷な鍛練の積み重ねが、演武会で花開く。

「企画から実行まで、幹部全員(当時七人)で手分け、協力して開催したものです。小倉市民会館の大ホールのステージで、全団員が一糸乱れず演武を披露し、万雷の拍手を浴びたことを憶えています。この演武会を最後に交代するわけですから、三年半の応援団活動の集大成でもあったこの演武会が無事に終わった時の満足感は、今も心に強く残っています」(原田)

幹部だからこそ悩んだこともあり、挑戦することもできた。大学紛争の最中、我が応援

団も過激な学生運動に翻弄され、無力感が漂い、団存亡の危機を感じた。しかしながら、同時に、組織を活性化しようという気運もあった。

「変革を早急に実施しなければ、応援団の継続が難しくなる」(末次)

なんとかしなければと、大学当局へ団予算の増額要求をし、実現する。また、初めての大学祭での体育館におけるダンスパーティーの許可を得る。そのダンパ収入を大団旗の新調、太鼓の張り替えなどに充て、新たな団活動への備えにすることができた。

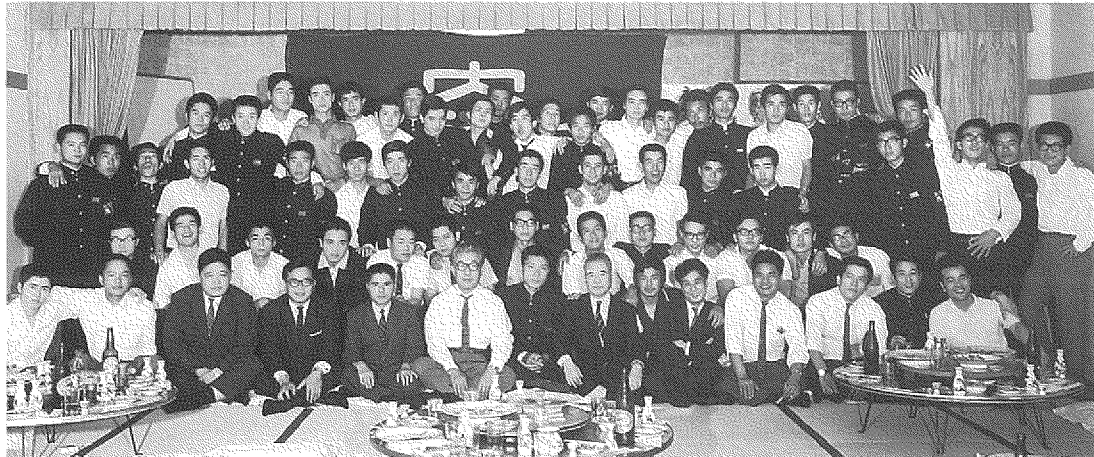
どの時代の応援団においても、次代にバトンを渡す努力をしてきた。そして、今日の現役応援団が存在している。そこに五十年の伝統が脈打っている。

現役応援団を決して絶やしてはならない。なぜなら、それが存在することによって、我々の生きた時代が、正当で、誇れるものであったと思えるからである。

応援団よ、永遠なれ。



小倉市民会館で開催された「初夏応援団と軽音楽」(昭和45年6月4日)



第11代目幹部披露宴(昭和43年6月22日、小倉飯店)

第13代

北九大応援団卒!

リーダー部長 内田 哲信

早いもので卒業して三十年以上も経過します。私たち十三代目は、昭和四十三年の入学です。私は家庭の事情で経済的余裕がなく、入学後も、数カ月は宇佐市から日豊線で汽車通学をしていました。

そんな私も入学当初は、大学では思い切りスポーツクラブ活動を楽しみ、卒業時には家族も驚くような一流企業に就職したい!と思っていたものです。ですから学内でのクラブの勧誘には積極的に耳を傾け、帰りの汽車の中では、入団後の活躍を一人想像して楽しんでいたので覚えています。しかしながら、現実には私に入団を許されるクラブはなかなか見つかりません。

そんな中であって応援団への入団を決めたのは、はつきりとは覚えていませんが、ユニフォームも必要なく、練習時間も負担にならないからだったと思います。活動内容もよく知らず、特に希望して入団したわけでもありませんが、同期の中にあっても入団時期は遅かったはず。たしか、九州六大学野球春季リーグ戦の開幕前でした。

私にとっては、入団後はシゴかれながらの

キツイ練習の毎日でしたが、球場に出掛けての野球応援は一つの楽しみでした。また、入団時の幹部であった十代目の先輩方には大変お世話になりました。初めて経験することも多く、大学生活にもなかなか慣れない中、先輩方には選択科目の選び方から試験対策、下宿先の選び方や安く満腹になる食堂なども教えて頂きました。もちろんアルバイト先も紹介して頂いたし、当時流行していた徹夜マジジャンも教わりました。

また同期の助けもありました。地元出身の岡村君には、いつも彼の実家に押しかけて食事をご馳走になり、またレポート提出も助けてもらいました(笑)。

四年間応援団活動を続け、先輩方や同期との思い出は数限りなくあります。辛くキツイ練習、炎天下での野球応援、達成感に満ち溢れた演武会、楽しかった大学祭。四年間のほとんどを応援団で過ごしたわけですが、どれも忘れ難い貴重な経験ばかりです。そんな我が北九大応援団も、創団五十周年を迎えようとしています。私たちが先輩方から受け継いだものを、後に続く後輩達が三十数年にわたって守ってくれたこと、これほどうれしいことはありません。

大学卒業後、よく高校時代の友人から「お前は北九大の何学部を卒業したんだ?」と聞

かれ、「俺は北九大の応援団を卒業したんだ!」と答えていました。冗談半分、本気半分であったと思います。今後とも、現役諸君のご活躍と、北九大応援団並びにOB会がますます発展することを願って止みません。



第13代目幹部歓送会 (昭和47年3月1日)

第14代

故人を偲ぶ

団長 北嶋 猛

入学した時、大学の紹介で部屋を借りたのですが、五部屋あるうち私だけが一年で、あとは全部四年生でした。入学した後何日間かは、不安な日々を過ごしたことを覚えております。

その中の一人が高橋先輩で、一年間は、風呂も食事も、魚町でパチンコをするのも一緒だったように思います。

もちろん一年生の私は先輩たちのコピーを入れ、洗濯、靴磨きなどをしておりましたが、生来従順な性格のせいか、苦にならなかつたように思います。

私たち十四代目は六名でしたが、副団長をしていた賀来君が残念なことに他界しました。亡くなる三カ月前に仕事で天草に来た際、三時間程色んな話をしたことが、懐かしく思い出されます。

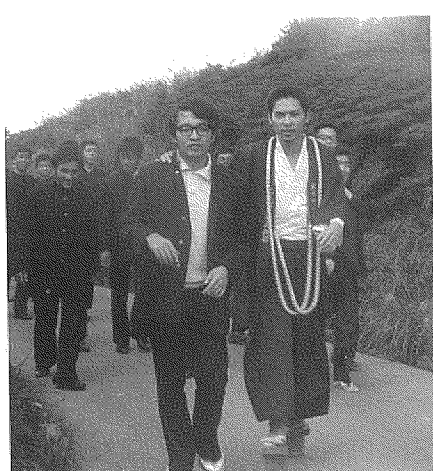
永岡先輩については、仕事で来られた時、牛深で夜遅くまで飲んだことを思い出します。

また、平田先輩とは麻雀仲間、大阪では家族で遊んだりしていた関係でもあり、非常に残念に思います。

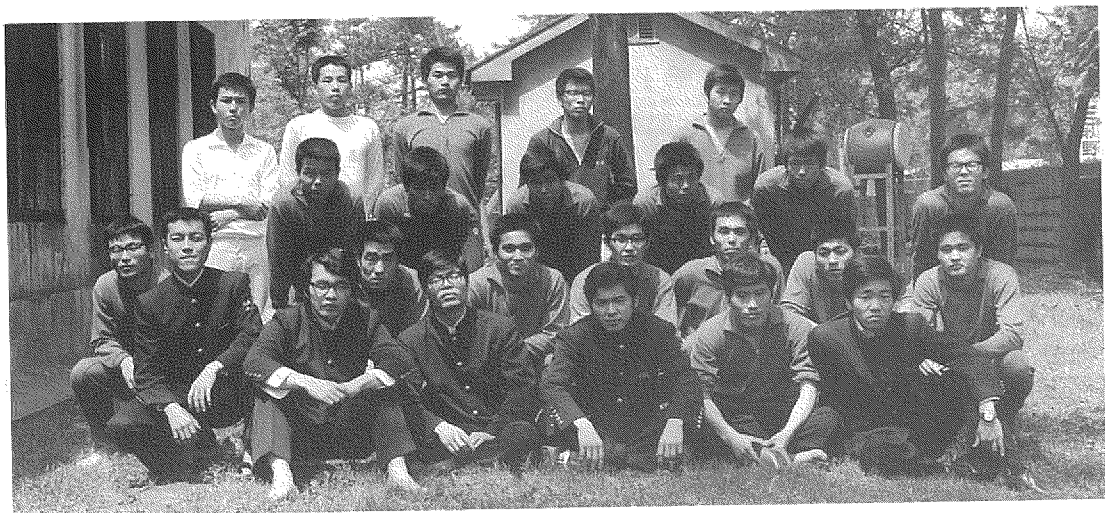
皆様方の御冥福をお祈りいたします。



谷伍平北九州市長(中央)を囲んで(第15代目幹部披露宴)



左から、今成博幸、北嶋猛



第15代

応援団創立五十周年によせて

団長 木下 哲治

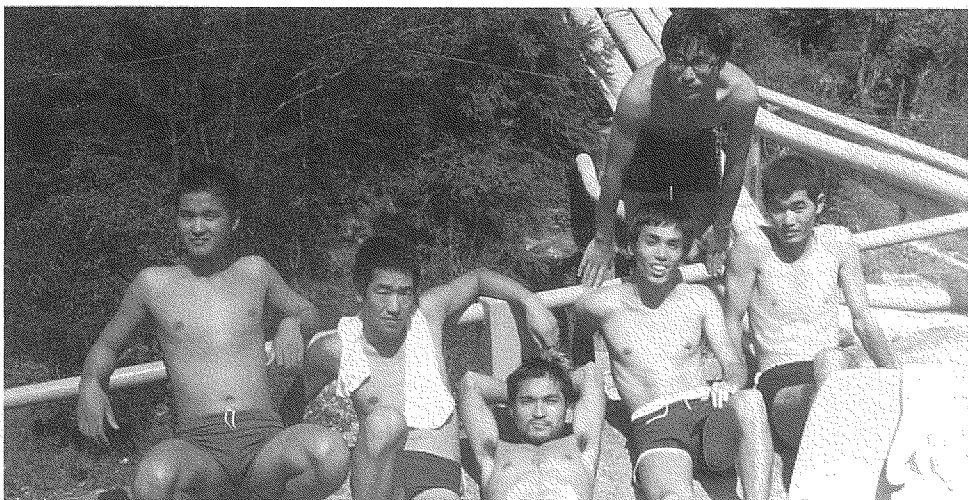
応援団創立五十周年おめでとうございます。半世紀の間、伝統を引き継ぎ、新しいスタイルも取り入れながら応援団を存続させてきたことを、後輩たちに感謝したいと思えます。

我々にとって応援団は、学生生活そのものでした。六月の演武会、夏のインカレ、九国大との応援合戦、資金稼ぎのアルバイト、大学祭での屋台とダンスパーティー、幹部交代の合宿、小倉駅前での壮行会、空手道場裏での昼休み練習、観音様までのランニング、スナックローマ、マコト、電車の中での挨拶(押忍!)、競馬場での花見など、苦しかったことや楽しかったことが走馬燈のように思い出されます。

他の大学では廃部になった応援団もあると聞きます。時代の流れの中、団員確保も厳しいと思いますが、北九州市立大学応援団の伝統を守り、六十年、七十年と増々発展されることを心より祈念いたします。



第15代目幹部披露宴



第16代

思い出

渉外部長 生野 徹男

昭和四十六年春、当時既に私服が一般的だった校内を学生服で歩いていた私は、たちまち応援団の勧誘を受けた。

同窓会館でコーヒーをご馳走になっていると、やがて森下先輩が現れた。竹を割ったような性格の人だと伺っていたが、正しくその通りだった。私は、先輩の差し出した手を固く握り返したのだった。

今、私の前に一枚の写真がある。小倉球場での応援風景である。観客の装いからすると春のリーグ戦であろうか。団員が同じ間隔で観客の間に立ち、ダッグアウト上のリーダーの演武に合わせ、声の限りに応援している。今にも太鼓の音や声援が聞こえてきそうである。

その翌年、夏のインカレが鹿児島で行われた。中でも圧巻だったのは、市中パレードである。鹿経大のある下福元町から、確か今の中央駅までだったと思うが、各大学が団旗を先頭に、大きな声で歌いながら闊歩していくのである。

帰りの汽車の中で初めて飲んだ「白波」は、潰れた喉が焼けたかと思うほど痛かったが、

実に旨かった。

音感が良く、二回生で鼓手を務めた竹上は、その持ち前の社交性と決断力が認められ、副団長に抜擢された。

演武で切れの良い線を出していた鈴木は、三回生で「連呼 北九手拍子」を演じ、後に後輩思いのリーダー部長となった。

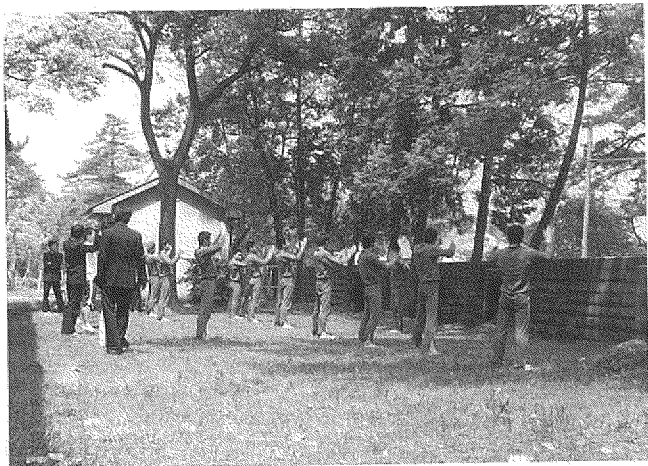
当時新設されて間もない中国科の永田は、そのまじめさが認められ、財務部長を任せられた。

体格が良く、見事旗手を務めた外山は、そ

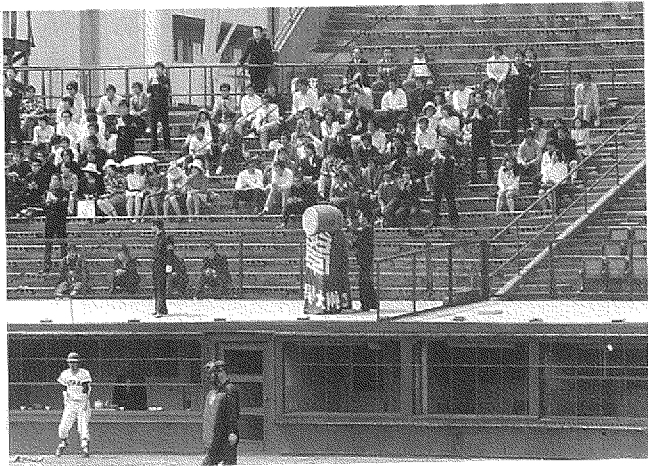
の実務能力を買われ、総務部長を拝した。私は酒が強かったので渉外部長を任せられたわけだが、営業職の私には良い経験だったと思う。

そして温厚で努力家の福重は、晴れて団長となり、団長演武「烈火の拍手」を見事に演じきったのである。現在、皆元気に仕事に励んでいる由。

最近、新聞で、九国大と九大で応援団再結成の動きがある、との記事を読み、嬉しく思った。現役諸君の健闘を祈る。



毎日発声練習を行った道場裏の空き地



昭和47年、小倉球場での応援風景(鼓手は竹上勝男)



# 我が青春

団長 竹下 敏章

我々十七代目の入学は、昭和四十七年。学園紛争の終末期である。

当時は十四代目の北嶋団長率いる応援団で、武闘派のイメージが強烈に残っている。

海外駐在の商社マンを目指して外国語学部に入り、「さあ、やるぞ」という意気込みも、北嶋団長の洗脳を受け、大学を守るための情熱(?)にすり替わった。同期の福島と共に「右翼暴力分子」というありがたい名前を頂戴し、全国紙の三面記事にも載ったりと、応援団に捧げた一年間が鮮烈な記憶として残っている。

十七代目の構成は、団長の竹下、個性派でダンディズムを追求していた副団長の福島、理的でまとめ役の副団長・村田、足が長く演技にはこだわったリーダー部長・谷上、バチさばきがうまく、まちがいはなくハンサムだった鼓手長(総務部長)・仙崎、大きなハートで常に体育会とのパイプ役だった旗手長(財務部長)・川路民男の六名である。

卒業後は、お互いに会うこともなく現在に至っているが、五十周年の集いがあれば、久しぶりに旧交を温めたいものである。

私事ながら、エールを送ることが一つの芸になっており、海外での日本選手団の壮行会、ゴルフコンペの送別会、社内の営業会議の打ち上げ等々、この武器はなかなか使えるもので、卒業して三十年近くになるが、これも応援団に入団した賜物である。恐らく、これからはしばらくはお世話になると思う。

ありがとう、我が青春の北九大応援団。



# 嗚呼！花の応援団

団長 国久昇

昭和五十年頃、漫画「嗚呼！花の応援団」が大流行していて、我々はちよつとイイ気分が街を歩いていた。

一年次から三年次までは、髪型はスポーツ刈りか角刈り、靴下は黒、カッターシャツは白、胸には大きめの団員バッジ、詰め襟のホックはいつも締めおかなければならず、団室にも十二時前には入室していなければならなかった。幹部はすべてにおいて自由で、その象徴といえるスリムな幹部バッジは憧れであった。

たまに何かの機会に、団室に酒、ツマミを持ち込んで、大宴会となることがあった。下級生は余興に懐メロ、軍歌、春歌を披露し、特に定番の春歌の時は大合唱となり、周囲の迷惑をかえりみず大いに盛り上がった。

団員の中には、真っ赤な顔で授業に出る真面目な者もいた。殆どの者がサボったことは言うまでもない。

我々が一年生の時の鹿児島インカレでは、炎天下、各会場で演武による母校選手の鼓舞を行い、重い団旗や太鼓と共に駆け回った。連日の猛暑で、脱水症状に耐えながら整理

していた時に、ふと見上げたビルの屋上の「スプライト」の看板が何ともまぶしかったことが、今でも脳裏に焼き付いている。そんな苦勞の後の夜に、翌日の朝食の醬油がしみるような鉄拳制裁が待っていると、三年生や幹部が口々に言っているのを聞いた。

私は、そんな理不尽なことはない、もし本当にそうなら好きな応援団でもやめようと思いついて、その夜の食事に臨んだ。

あにはからんや、その前触れは全くのウソ



第17代目幹部歓送会(昭和51年2月28日)



第18代目幹部披露宴(昭和50年9月13日)

であり、一年生と二年生の大慰勞宴会がフタを開け、ドンチャン騒ぎとなった。よし！応援団を最後まで続けよう、と決心してフトンに入ったのは、一年次全員の思ひだったに違いない。

## 体が浮いた

副団長兼親衛隊長 岩佐 真治

昭和四十九年春の入学式、合格の喜びと希望に胸膨らんだ私は、式の後、一人で学内を探索していた。体育会・文化会系、その他多くの部やサークルが、部員獲得のため、それぞれのパフォーマンスを繰り広げていた。

私は高校時サッカー部に所属していたが、いきなり部活で拘束されるより、もっと自由にのびのびと青春を謳歌してみたい、彼女も見つけないなどと、自分なりにあいまいな、ふわふわとした妄想を抱きながら……。

するとどうだろう、本当にふわふわと、体が宙に浮いて軽くなったではないか。見ると、角刈りで学生服を着た、時代から取り残された野武士のような二人の人たち（両先輩がどなたか確定できませんがお許しください）から両脇をしっかりと抱えられ、現代とは全くと言っていいほどマッチしない、古くて暗い部屋に連れていかれた。これが私の人生を変えてしまった「体が浮いた」事件であった。

私は団の活動や練習には出ていたが、正直言って、一回生の夏休みが来るまで心は逃げ回っていた。高校の時もスポーツ刈りで学生服だったので、通学時（直方から小倉）に、

以前と変わらぬ私の格好を見た高校の同級生から、「岩佐、なんやその格好は」と興味津々に尋ねられては適当に答え、応援団に入っているなどとは、自分からは絶対に言えなかった。

とにかく、人とは違って私服で通学できないこと、自分の意志で思うがままな格好ができないことが本当に嫌だった。学内で私服から学ランに着替えたりもしていた。

そんな中途半端な私も、夏休みを機会に変わっていった。その理由の一つは先輩たちである。厳しくてきつい練習、礼儀、挨拶など、なんでもこまめでされなくてはいけないのかと、とにかく精神的に苦しかったし悔しかった。

だが、一日の活動が終わった後で、二回生の先輩からよく面倒を見ていただいた。厳しい財政の中から捻出された湯豆腐を、よくご馳走になった。下宿にも招待され、先輩の失敗談や苦しかったことなど色々教えていただいた。酔いつぶれた私を抱え、部屋に泊めてくれたこともあった。

私は、義理と人情から、先輩たちの温かい気持ちから、もう逃げ出すことができなくなってしまうのであった。

気持ちが吹っ切れた私は、夏休みの遠征合宿が終わった頃には自宅通学をやめ、下宿に生活することに決めた。もう人目を気にし

ながらこそそこそと着替えたりすることもやめていた。

もう一つの理由は、共に四年間を過ごした四人の同級生の存在である。入団した（させられた）時の境遇、要因もよく似ている。どちらかというところ、入団を断れなくてはならないと気弱に始めさせられたのではないだろうか。意見が食い違ったりして喧嘩もよくした。練習を離れても、酒を飲んだりアルバイトをしたり、彼女を紹介したり……。

厳しい礼儀作法やきつい練習で、辞めようかと皆で真剣に話し合ったこともあった。でもその時、先輩の気遣いや仲間の誰かが言った「もう少しがんばろう」という言葉に勇気付けられたことで、五人揃って団活動ができ、十九代目幹部として我が北九州市立大学応援団の中に小さな歴史を記すことができたのだと思う。

応援団に入って、きついこと、苦しかったこと、悔し泣きしたことなどたくさんあったが、色々な人たちに巡り合えて支えられたことは大きな財産となっている。それと、もう一つの財産は、気合と抑忍の精神を学んだことである。目まぐるしく移り変わる世の中だが、時には抑忍の気持ちに返り、自分自身を見つめ直したいと思う。

抑忍！

## 創団五十周年に寄せて

団長 山本 隆雄

伝統ある我が北九州市立大学応援団が創団五十周年を迎えると聞き、年月の流れの速さに驚くと共に、これからの応援団の隆盛を願って止みません。

我々の現役時代には、今回実行委員長を務めておられる上田先輩がOB会長をされていて、先輩諸氏のご尽力により創団二十周年記念式典を挙行していただきました。同窓会館でのOB会総会の後、小倉飯店で記念式典が開催され、二十代目を務める責任の重さと誇りを感じたことを、鮮明に憶えております。

私の現役時代の一番の思い出は、創団以来初めて、全九州学生応援団連盟本拠校になったことでした。

当時の連盟加盟校は、八幡大（現・九国大）、福岡大、西南大、九産大、久留米大、熊商大（現・熊本学園大）、鹿児島経大といった九州の伝統ある応援団で、加盟校以外の大学から一目置かれていました。残念ながらそれまで本拠校に選ばれたことはなかったのですが、幸運にもその機会が訪れ立候補し、当選することができました。

当時も、団員の確保は至上命題であり、演

武会や応援合戦など団の運営するには最低でも各学年五名は必要との認識から、新入生勧誘には特に力を入れたものでした。しかし、熱心さの余り暴力事件に発展し、団の解散という不幸な結果が生じた大学もありました。

その中で、唯一の公立大学応援団である我が北九州市立大学応援団は、「団結、礼儀、服装」の団則と、「団員は全学生のリーダーであることを自覚すべし」、「鍛練を通じて堅固な精神力と忍耐力を養うべし」、「人間形成に努めるべし」の団訓を常に自覚し、昼は同窓会館前の広場で発声、基礎、一―五型の鍛練、夜は「まこと」にて酒の練習に励んだことが強く印象に残っています。

近年の団員不足は目を覆うばかりです。平成十六年の入団者はないと聞き、団の存続さえ危ぶまれる現状には、憂慮に堪えないものがあります。OB会報が届くたび、このことに一番に目が行き、演武や伝統が伝わっているのか心配させられます。

若者の価値観の相違は相当にあるにせよ、勧誘のやり方に問題がありはしないか、再考を願いたい。私たちが現役幹部の頃、本人の説得はもちろんのこと、時には親との直接交渉を行い、説き伏せたこともありました。

現役団員は、誇りと自覚を持ち、自分がやってきたことに対する自信と経験を更に活用

し、団員確保に邁進してもらいたい。

最後に、伝統ある北九州市立大学応援団が永久に受け継がれ、発展しますことをお祈りし、お祝いの言葉とさせていただきます。

創団五十周年、誠におめでとうございます。



第20代目幹部歓送会（昭和54年2月17日）

創団五十周年によせて

団長 森部 康英

月日が経つのは早いもので、私が卒業して二十五年が経過し、その間、大学院が、そしてびびきのキャンパスには国際環境工学部が開設されました。また、名称が「北九州市立大学」に改められ、更には独立行政法人化も予定されており、新しい時代に適応するための様々な変革が行われています。

我が応援団においても、近年、団員の減少や女性団員の入団など、時代の変化を痛感しているところではあります。

遠隔の地であって、大学にはなかなか足を運ぶ機会がありませんが、チアリーダー部の誕生や久々の演武会の開催などの便りを聞き、現役諸君の活躍を心から応援しています。

また、先日は野球部のリーグ優勝で数十年ぶりの全日本大学野球選手権出場となり、応援団も遠征すると聞いて、都合がつけば応援に行きたいと考えたのは私だけではないと思います。公立大学が出場すること自体まれであり、さらに一勝を上げたことが新聞にも大きく報道されました。これを見て、忘れかけていた現役当時の応援風景や先輩後輩の顔、厳しい練習などの思い出が蘇り、胸が熱くな

る思いがしました。

さて、我が応援団も五十周年を数えることとなりましたが、創団当時、人や資金集め、大学との交渉、演武や応援歌の創作など、先輩方のご苦労は計り知れないものがあつたことと推察されます。このような先輩方の努力と心意気、そしてその伝統や応援団魂を歴代団員が守り、受け継いできた結果、五十周年という輝かしい記念の年を迎えることとなったのです。

これからも応援団には、好むと好まざるとに拘わらず、時代に応じた様々な変化が訪れることと思います。しかし、華やかなスポーツを影で支える応援団の存在は、決してなくならないものと確信しています。

最後に、私事ではありますが、来年長女が大学受験を迎えます。私は迷わず、我が母校を受験し、応援団（チアリーダー部）に入団することを勧めました（残念ながら競争率が高くて合格は難しいようですが……）。

娘が北九大を受験するかどうかは分かりませんが、私が通った大学を、そして四年間活動した応援団を、近いうちに一度見せてやりたいと考えています。

個性派軍団

団長 岡部 利行

私たち、二十二代目は七名でした。今考えてみますと、七名ともそれぞれに特徴があり、応援団の幹部としてはバランスのとれたいい集団であつたと自負出来ると思います。

財務部長を務めました片桐君は非常にしっかりしており、財布のヒモが固い人でした。副団長の林君、大江君が対外折衝で各大学を訪問したり迎えたりする際には、何にお金を使うかしっかりと聞いていただき、私知っている限りでは、初めて後輩にお金を残した会計担当であつたと記憶しています。

リーダー部長を務めました築地君とは、卒業後、二人とも東京でサラリーマン生活を送っていましたので、よく飲みにいきました。ある時、新橋の駅前で旅行会社のパンフレットを寒さよけに巻きつけて二人で寝て、朝、通勤途中の人から起こされたことも、今となつては楽しい思い出です。築地君は上級生になるにつれ最も変わっていった男で、入学時には大変優しい男だったのですが、リーダー部長になつてからは、鬼のような形相で厳しい指導をしていました。

統制部長を務めました野澤君はビンタ係でした。気持ちを引き締めるために気合を入れるのが彼の役目で、十数名の団員のほおを叩いていた姿は、今でも記憶に残っています。

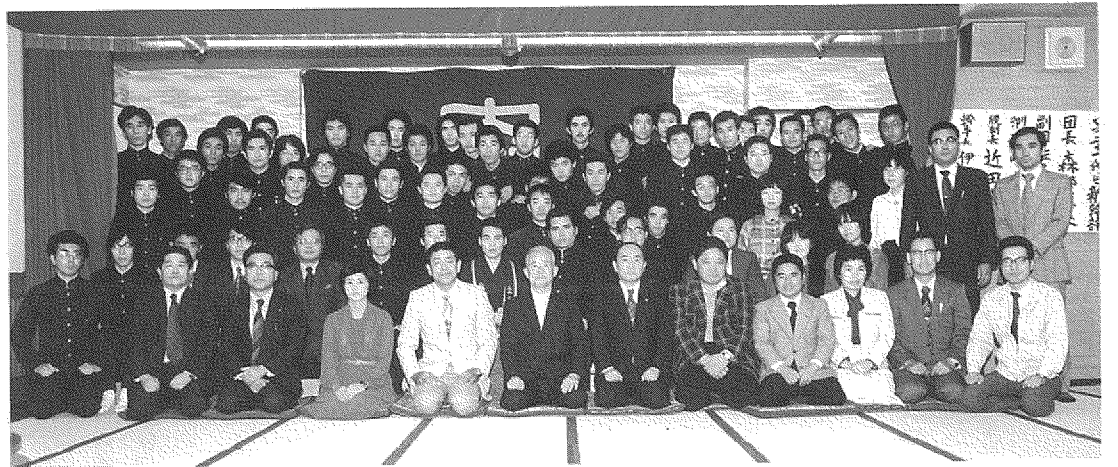
中学の教師になつており、今はもちろん手は出せませんが、いい経験になったのではないかと勝手に思っています。

総務部長を務めました持田君は気持ちの優しい男で、いつもニコニコしていて、怒った顔など見たこともなかったのですが、四年生の時、新入生勧誘の際に何かのキッカケで大変怒り出し、今でも会うとその時のことが話題に出るほど温厚な男です。今は宮崎で教師をしています。

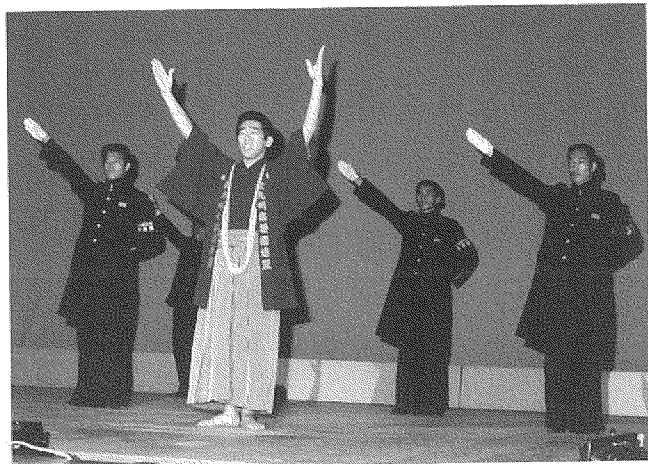
副団長を務めました林君は関西出身で、滋賀の競馬場の近くで育ったせいとか、競馬新聞を愛読するユニークな男でした。副団長になると、それまで貯めていたお金で後輩を可愛がり、滋賀出身の近江商人はやるばい、と妙に感心させられたらしい男です。今は地元の滋賀銀行で頑張っています。

副団長兼親衛隊長を務めました大江君は最もユニークな男で、小倉南高校の時も応援団員だったそうで、体も大変柔らかく、演武も上手でした。

彼はただ一人地元の出身で、実家が美容室をされていたので、幹部になつてから築地君、



第21代目幹部披露宴（昭和53年10月7日）



第22代目演武会

林君と三人でお邪魔し、アイパーマンなどのパーマをかけてもらいました。卒業後も忘れた頃に電話があり、「勤めていた会社の社内独立制度に応募して、保証人がもう一人いるから、お前なれ」とムチャクチャな男でした。その後再婚することになり、夜中に電話がかかってきて「お前、仲人しちゃれ」と言われ、私が仲人、野澤君が主賓の挨拶、持田君が乾杯の音頭をとつたのも懐かしい思い出です。その大江君は、再婚後数カ月のちに病気で亡くなってしまいました。

第23代

第二十三代目北九州大学応援団

団長 藤野 景三

小生、就職後は海外勤務が長く（最近も平成十四年秋まではシンガポール、マレーシアに十年間在住）、日頃は応援団の活動とは疎遠がちです。しかし先日、神宮で久し振りに我が北九応援団の熱気溢れる応援に接し、団員数は少数ながら、それ故の奮闘ぶりに頭が下がりました。

小生の時代には既に、時代の流れから団員不足の兆候は始まっていましたが、それでも幹部七名、総勢二十三名を数えていました。

非力な小生を支えてくれた、強力で頼れる幹部たちを紹介すると、まずは中村、浅野の両副団長。中村氏はニヒルで冷静沈着、バンカラで有名な熊本済々養高出身ながら、ナウイ（今では死語）センスも持つ。

浅野氏は明朗快活、純朴な性格で、真つ直ぐ過ぎて要領良く立ち回ることの出来ぬ、テレビの青春ものに出てきそうな熱血漢。ただし酒が入ると人が変わり、酒の上での失敗談もいくつか……。

小生と同じクラスだった親衛隊隊長の土田氏は、剣道部を辞め、自ら入団してきた変わり種。上下関係の厳しい応援団で途中入団は



九州学生応援団連盟幹部研修会（昭和56年3月）

異例であったが、それが認められ、かつ下の者が彼についてきたのも、彼の団に対するひたむきさ故であろう。鬼をも恐れぬ突撃隊長である。

友保リーダー部長は、ハードな練習を涼しい顔でこなす鉄人。銅の如き肉体のみならず、大学祭の団主催模擬店でアルコールを飲んだ女子高生を説教して帰宅させるといふ、正に堅い一面を持つ。

団の金庫番・財務部長の田浦氏は、小柄ながら肝っ玉がでかく、何を隠そう団でも一、



対八大春季応援合戦（昭和56年5月19日）

二を争うタフマンである。我が代で唯一小倉に残り、現在OB会でも活躍中。

最後を締めるのが山口総務部長。彼こそ応援団の良識派。温厚な性格ながら強い信念を持ち、彼の言葉には説得力がある。彼ぞ正しく応援団の良心である。

当時は振り返ると、年に一度の晴れ舞台演武会、春秋の八大との応援合戦、緊張感溢れる他校応援団との交流、一、二回生の時は避けて通り、幹部になるとツケで通った「まこと」など、懐しい思いは尽きません。押忍

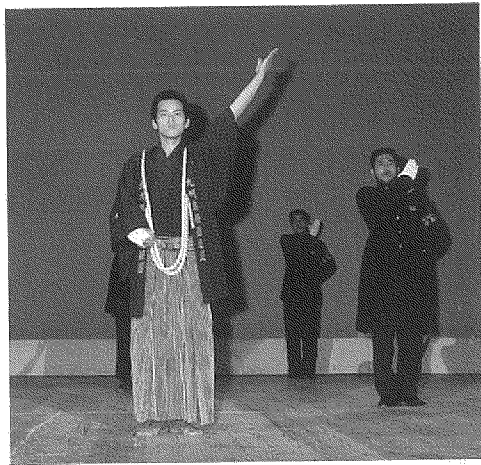
第24代

祝五十年

団長 今市 伸浩

月日がたつのは早いもので、我々二十四代目が卒業し二十一年が過ぎてしまった。とはいえ当時、叱咤激励、ご指導いただいた関係各位、諸先輩の方々、支えてくれた後輩諸君、そして同期四名の顔が、出来事が、昨日のことのように甦ってくる。

時代は刻々と変わってきているが、根底に流れている精神は、いまだ不変のものであり誇りに思うし、また永久に受け継いでいかなければならない。また、我々OBも応援団で培った精神を忘れることなく、社会に貢献し



演武「校歌」（昭和57年の演武会）

なければならぬ。

以下、二十四代目の近況を簡単にご報告させていただきます。お世話になった方々へのお礼に代えさせていただきますと思う。（一）内は当時の役職。

●今市伸浩（団長）  
大日本塗料に勤務。海外事業部に所属し、愛知県を拠点に中国、東南アジア方面へ営業活動中。子供・男三人。



サークル会館の団室前で

●佐藤誠一（副団長兼親衛隊長）

大分県警に勤務。本部所属で事務職。子供・女二人。

●中嶋憲明（副団長兼統制部長）

NTT西日本に勤務。福岡市を拠点に営業活動中。子供・女二人。

●野尻裕二（リーダー部長）

阿蘇町役場勤務。子供・男一人、女一人の計二人。



幹部交替合宿にて（後列4名が第24代目幹部）

第25代

耐え忍ぶ

副団長兼リーダー部長 小泉 紀彦

早いもので、私が北九州市立大学を卒業してから二十年、北九州市立大学応援団に入団以来二十五年が経過しようとしており、今更ながら年月の流れの速さに驚かされております。

思えば、私の応援団生活は、大学入試合格が判明した時点で決まったも同然でした。と申しますのも、当時第二十二代目副団長を務めておられた故大江先輩の弟さんが私の同級生で、私の情報は応援団に筒抜けだったからです。

入学式の直後、私は名指しで応援団団室に連行されました。私の第一印象は「とんでもない所に連れ込まれてしまった。早くこの場から逃れたい」でした（今思えば、あの時に拒絶してさえおれば、私の想像したバラ色の学生生活があったのかもしれませんが……）。

私は解放されたい一心で、その日のうちに入団を承諾してしまいました。生まれて初めて坊主刈りにしたわけですが、そのあまりにも不細工な頭の形、凶悪犯のような顔付きに、鏡の前で深いため息をついたのを今でも鮮明に記憶しております。

その後一年が経過した頃、私はまた、とてもない事態を迎えることとなりました。

私には中学卓球部時代からの友人がおり、その彼が一浪の後、めでたく北九州大学へ入学することとなりました。私は何度も「お前は体格が良くて目立つから、くれぐれも団室には近寄らないように……」と忠告しておりました。そんなある日、勢いよくドアをノックし名乗りをあげて、見慣れた後ろ姿が団室に飛び込んできました。振り返って目が合った途端、私は愕然としました。なぜ彼がそこに座っているのか？ その男は、後の二十六代目団長・鳥井本氏でした。

当時の応援団の一回生の差は天と地の差（多少大袈裟ですが……）でありました。規律の厳しい団生活を、私たちはどう送ればいいのか？ 途方に暮れました。しかし、すぐに解決策は見つかりました。彼は私に敬語を使い、私が唾えたタバコに即座に火をつけ、私は彼を怒鳴りつけ、殴りました。彼には意識的に殊更辛く当たりました。全ては団の規律維持のために……。そして団活動が終わって二人になると、私は何時も彼に謝っておりました。

なんとも奇妙な三年間でしたが、一秒たりとも同級の馴れ合いを他の団員に見せることなく過ごせましたのも、度量があり、団長の

器を持ち合わせていた鳥井本氏のお陰です（後のOB活動が彼の度量の大きさを見事に証明しております）。

良きにつけ、悪しきにつけ、普通の学生生活では絶対に行えない貴重な体験をさせて頂きました。それは、あらゆる状況下で耐え忍ぶということ。歳月の流れの中で、そんな気概が失われ自身を見失いつつある今、まことに僭越ではございますが、度量不足で団長にはなれなかった私に今回寄稿の機会をお与えくださいましたこと、また当時の想いをもとに自分を見つめ直す機会をお与えくださいましたことに対し心より感謝申し上げますと共に、末筆ではございますが、OB諸先輩方、現役の団員の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます、私の当時のご報告とさせていただきます。有り難うございました。



第25代目演武会

第26代

友へ

団長 鳥井本 忠信

「うおーす！」  
春爛漫の入学式の日、これから始まる大学生活に夢と希望を膨らませてキャンパスを歩いていると、どこからか耳をつんざく奇声が聞こえてきた。

声のするほうに目をやると、黒い学生服を着たカラスのような集団が走っている。ははあ、あれがうわさに聞いた応援団か。その中に幼なじみの姿も見える。私は校舎の影に身を隠し、足早にその場を立ち去った……。

無理矢理入団させられて以来、四年間があったという間に過ぎ、社会に出て二十年もの歳月を数え、応援団も五十年の節目を迎えるこの時、二十六代目の皆さんの胸にはどのような思いが去来しているのでしょうか。

楠本さん、旗手みごとでしたね。背筋を伸ばし、微動だにせず団旗を守る姿は、本当に頼もしかった。小さいことにはこだわらない性格で、時には団の運営について激論を交わしたこともありました。あなたの中国語の発音が、いまだに耳に残っています。中国や東南アジアでの旅行の話も楽しかったです。今どうしているのですか。連絡がとれず、心配

しております。ぜひ一度お会いしたいです。

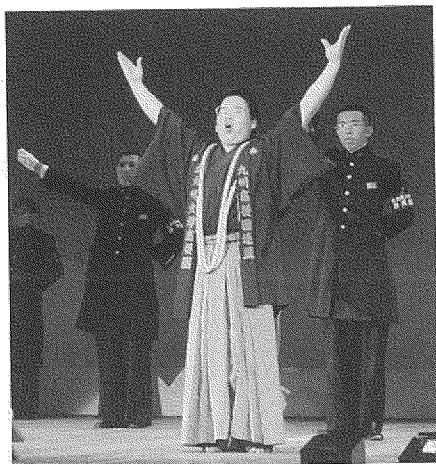
小浜さん、勉強との両立みごとでした。練習が終わって、簿記研究会に駆け込んでいた姿が、昨日のことのように思い出されます。副団長兼リーダー部長として厳しい練習を率先して指導し、すばらしい応援演武を築いてくれました。現在は税務署での仕事をきっちり果たし、少し心配していた結婚もされ、これから明るい奥さんとともに益々活躍されることと思います。

橋本さん、親衛隊長として他大学との交渉、団全体の統制、本当にご苦労様でした。関西弁丸出しでまくしたてる、どこことなくユニークな姿と俊敏な行動力が、応援団に大きな活気をもたらしました。涙もろい面もあり、卒業間近の夜、校舎の片隅で流したあなたの涙は決して忘れません。今では警察官として持ち前の正義感をいかに発揮して、世の中の悪を糾していることでしょうか。

私も北九州に在住し、社会の一翼をになうべく日々努力しています。また、大学から応援団の火を決して絶やしてはいけないとの一念をもって、OBとして現役への支援を続けております。四人全員の再会を夢見て、これからも応援団での経歴を力にし、社会での使命をしっかりと果たしていきましょう。



第26代目メンバー（サークル会館前にて）



第26代目演武会

第27代

現役時代の思い出

団長 井上孝一

昭和五十八年、七名いた二年生も六月の演武会終了時点で五名となり、秋の応援合戦終了時点では最終的に鬼塚、寺田、林、井上の四名になりましたが、お互い切磋琢磨しながら、四年間何とか頑張り通すことが出来ました。

その四名の同期を紹介させていただきます。

●副団長・鬼塚昭一

福岡県朝倉高校出身。兵隊時代のあだ名は「大魔神」。

四人の中で唯一車（確かトヨタ・マークII）のオーナーで、同期の中では一番女性に人気があったように記憶しています。

現在、岡山市で活躍中（NEC勤務）。

●親衛隊長・寺田弘

佐賀県佐賀北高校出身。兵隊時代の特技は「誤字脱字の天才」。

単車、麻雀をこよなく愛し、四人の中では一番大学生活をエンジョイした男です。彼の代わりに、よくピンタを受けました。

現在、佐賀県の高校の英語の授業で教鞭をとっています。

●リーダー部長・林秀樹

岡山県勝山高校出身。兵隊時代のあだ名は「ねずみ男」。

高校時代、趣味でスキーをやっていた関係で、とにかく足腰が強く、あの大団旗を、どんな悪天候の中でも微動だにせず守り通しました。また、自称「哲学大好き人間」で、夜が明けるまでよく語り続けてくれました。

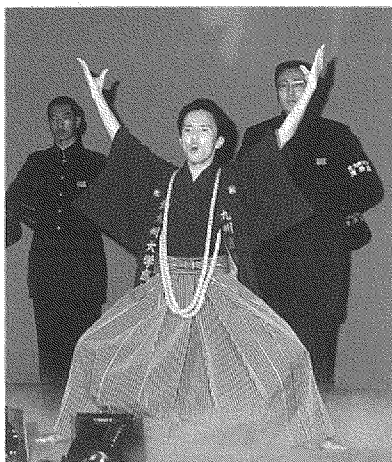
本学卒業後、広島大学で再度学問の道に入り、現在毎日新聞で活躍中です。

●団長・井上孝一

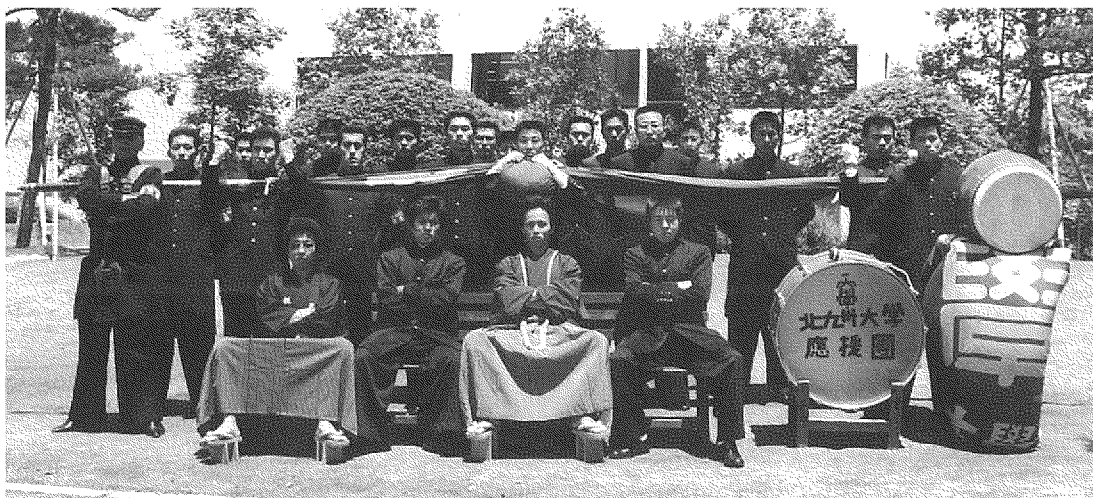
福岡県城南高校出身。兵隊時代のあだ名は「キューピー」。

「縦の規律、横の団結」のもと、書道部と掛け持ちながら、多くの良き先輩、後輩に恵まれ、四年間頑張ることが出来ました。

現在、福岡市に住み、西日本シティ銀行にて日夜奮闘中です。



第27代目演武会



第28代

最高の友

団長 古市哲也

今日日、普通の人は自分から応援団に入りたいなどとは言わないが、二十八代には自分から団室の扉を開けた奴がいる。親衛隊長・朝比奈昌二である。また、入学式の後、トイレを尋ねたら、学ランを着た先輩にサークル会館のトイレに連れていかれ、そのまま入団するハメになった副団長・橋本芳男（その他、長くなるので省略……）。

まあ、二人を筆頭にアホな連中が、よく六名も揃ったものである。当時、稀にみる人数の多い代であり、馬鹿な奴らだと、自分のことは棚に上げて、ペンを走らせながら改めて思い出している。

また、二十八代は、出身地が全国区だった私、団長の古市が北海道出身。副団長の長岡が下関（彦つトランドゥ）、幹事長の樽本が四国は丸亀、前出の二人（通称・ピラニア軍団）は刈田、若松で地元、そしてリーダー部長の峯下が鹿児島県は種子島と、日本の北から南まで、よくも偶然に集まったものだ。

特に印象に残っていることの一つは、テレビ出演したことだ。当時、若者を中心に人気のあった「たけしの元気が出るテレビ」の

「九州男児をさがせ」というコーナーである。

若気の至りというか、二十八代らしさというか、自分らで判断したもの、大学やOB会への相談を全くしておらず、後にOB会長をはじめ多くの方々に迷惑をおかけしたことを、この場を借りてお詫び申し上げたい。ただ、北九大をアピルしたい一心でのテレビ出演であり、そのことは今でも良かったと思っっている。

無鉄砲でよく喧嘩もし、毎晩のように酒を飲んでいた我々二十八代六名は、社会人とな



山口県萩市で行った合宿（昭和61年5月）

った今でも、本当に信頼できる友である。今年の年末にでも、北方の「星乃」に集合しよう！ 久しぶりに二十八代六名で、幹部会を飲もうではないか。



第28代目幹部披露宴（昭和61年10月）

団長 山本 恭裕

私たち二十九代目が入学したのは、昭和五十九年のことです。本誌を手にとられたOB諸兄と同様に、何のご縁か、今考えても全く不思議な体験でしたが、みな数時間、いや数日間に及ぶ説得に屈して、いつの間にか高い襟の学生服、ぶかぶかの学生ズボンを渡され、革靴の底の音も高らかに、学内を歩いておりました。

二十九代目は私以下、副団長・山崎聖二、親衛隊長・重信賢治、幹事長・金橋亮介の四名でした。

当時のことを思い出さず、久しぶりに古ぼけたアルバムを引っ張り出してみました。懐かしい顔、すっかり当時の面影を失ってしまった自分の顔、今も変わらないサークル棟など、懐かしく、つい見入ってしまいました。三十二代目以降のOB、OGの皆様はご存じないと思いますが、当時、現在の体育館前の広場には、「築山」と呼ばれるこんもりとした広場がありました。毎日の練習はここで行われるのですが、この「築山」がなんとも強敵でした。股割りをやれば山の勾配にバランスを崩していた金橋、腹筋を行う時は山の

勾配に逆らって苦しむ重信、とにかく「築山」には、辛い練習の思い出ばかりがあります。

この「築山」、私たちが三回生の時、新体育館の建設と同時に、きれいなプロック張りの「体育館前広場」に変わってしまいました。きれいで平らな広場は練習もやりやすかった気がしますが、なぜか今でも思い出されるのは、この「築山」の風景ばかり。

汗が滴り落ち、ジャージも汗でぐちゃぐちゃになり、そのジャージ姿で這いつくばり、泥まみれになって、それでもあきらめることなく、ひたすら声を張り上げて叫び続けた山崎。

そんな「築山」での経験は、私たちの人生の原点とでも言いましょうか、卒業後のさまざまな試練を乗り越えることが出来たのも、きっとこの「築山」の練習があったからと感謝しています。

現役諸君には、この「築山」の苦しみと、苦しみを克服する忍耐力をいつまでも後輩たちに伝え、北九州市立大学応援団が社会において「優秀な人材の宝庫」と呼ばれるよう日々鍛錬を続けていただきたい。ただそればかりを願っております。

「築山」の鍛錬が永遠に続くとともに、現役諸君の更なる健闘を祈っています。押忍！



思い出の「られつ」一かけら

団長 野口 泰昭

あえて華々しい応援の場面から視点を変え、より裏側に目を向けて……。

① 団長からの「そのままではええんか？」一本スジの通った男にならんか！で入団した初々しい自分の心。

② 覚えが悪く、どうしても自分で作曲、創作してしまっ中、マンツーマンで応援歌、演武(舞)を教えてくれた先輩の姿。

③ 「必修科目以外授業に出る必要は無し！」と言われ、やっと出た授業では、ボロで力いっぱい汗臭い「伝統の学ラン」に身を包んでいるため、思わずクラスの女子生徒に「近寄らないでくれ！」と叫びつつ履修し、気がついたら寝ている状態で自分だけ教室に取り残されていたこと。

④ あきらかに落ちこぼれの成績に、ある日教授から「応援団がこの成績じゃつまらんじゃろ！悔しかったら見返してみろ！」と喝を入れられ発奮したこと。

⑤ 先輩が練習中に団旗を落としたその日、練習後、先輩たちは団室から遅れて出てきた。その時なぜか皆顔が腫れていたけど、我々後輩それぞれに千円ずつくれて、翌日

兵隊全員が五厘の丸刈りで練習に望んだこと。無言の信頼関係？

⑥ モノレール車輦一輛に、応援団の人間だけしかない空間ができていた移動風景。

⑦ 福岡天神の地下街で、先輩からのありがたいご指示をいただき、女子学生に「僕とお茶飲みに行きませんか？」と言わせてもらい、その場で泣かせてしまったこと。

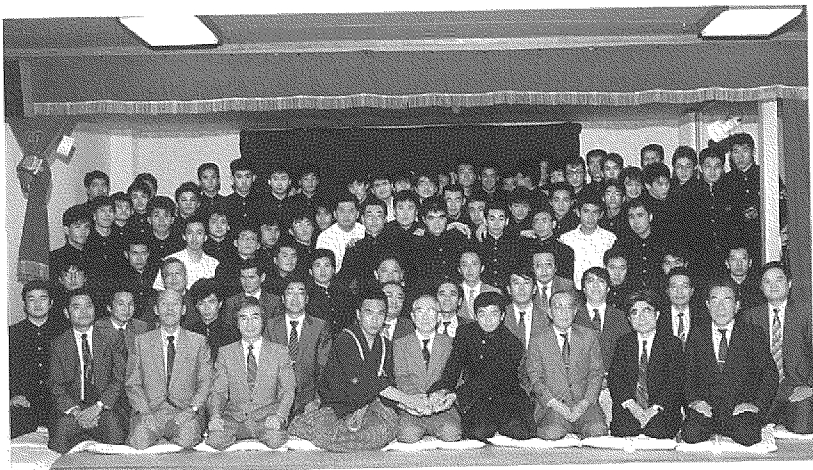
⑧ 一人孤独に頑張る時に、ふとした瞬間「祇園の小倉を思い出しゃー」と口ずさんでいたこと(その後卒業してからも、その癖は続く……)。

⑨ 団費を稼ごうと、知り合いからただでもらった筈を同期の奴らで売りに回ったこと。遠征からの帰りの車の中、安全ピンで足を刺して眠気を覚ましていた兵隊時代。

⑩ 学祭のパレードでの一升瓶回し飲み。体育祭でマラソンに出場した後にゲロだるまレースに出場し、本当のゲロだるまになり、夜もまた打ち上げでゲロだるまになって、一連の学祭はいつもこれの繰り返し。団室に泊まったり、下宿のトイレで寝ていたり、「何が悲しゅうて……」の世界を繰り返し広げていたこと。

今思うと、改めて「色々あったなあ」と他人事のように回顧しています。ただ、その後の人生で何か壁にぶつかる時、

大なり小なり挑戦すべき舞台に立つ時、「あの時にやり抜けた体力、根性はどうしたんだ！仲間たちもきつとふんばつとるぞ」と、今でも自分を励ましてくれる「心の支え」になる貴重な日々であったと思います。以上、月並みなまとめですが、「応援団、本当にありがとう。」  
押忍！



第30代目幹部披露宴(昭和62年9月)

立ちほだかる壁

第三十二代 田上 誠司

我が北九州市立大学応援団は、創世期の第四代目を除き、創団以来三十年間、コンスタントに各代四名以上の団員を確保してしま

た。しかし学生気質の変化が嘆かれて久しい昭和六十一年度、多くの新入団員の中で最終的に残ったのは、吉元、佐伯両先輩だけでした。我々の入団当時、二回生の両先輩は、自代は二名であるということに常に自覚し、「たとえ二名でも、歴代以上の働きをしてみせろ」という気概を持って活動していました。さらに、半年後の幹部交代後は五人幹部(三十代目)となるため、我々五人を徹底教育し、「親衛隊レベルの二回生」にまで引き上げるという大きな課題がありました。そのため、基本作法、基礎体力強化、演武の熟達、渉内・渉外行事、執務遂行、何事においても一切の妥協を許さず、我々の前に「大きな壁」として立ちほだかることになりました。高い技量を求められ、なかなか達成できない我々は、毎日のように正座させられ、練習時間よりも長い「ダメダシ」を受ける日々が続きました。

一年半後の昭和六十三年九月、「第三十一代目」は、吉元政史団長、佐伯勝己副団長のもと、親衛隊五名、二回生一名、合計八名でスタートしました。幹部二名、全団員八名というのは、創団当初を除けば最小であり、慢性化する「団員不足」への危機感は相当なものでありました。

OB会からは、伝統固執一辺倒を改め、スマートな応援団への変革を求められていた時期でもありましたが、「団存続の最大の原動力は伝統を守り抜くことである」との「信念」を貫くことを選択しました。

春には新入団員二名を加え、六月、歴代最少人数の十名で臨んだ第三十一代目演武会。小倉市民会館の観客席からは、演武に合わせ、拍手子が幾度となく沸き起こりました。なぜ拍手子が起こるのか、自身の体験や過去の演武会ビデオにはなかった光景でした。

後に聞かされた話ですが、OB諸先輩方から「歴代最高の出来であった」という評価を頂いたそうです。それがあの拍手子の理由でした。

最後になりましたが、我々が「一枚岩」となり、一人前となることが出来たのは、歴代諸先輩方、特に二年半にわたる第三十一代目先輩方のご指導の賜と、第三十二代目幹部一同、深く感謝いたしております。押忍

幹部になりたい

団長 田上 誠司

入団四日目、集合場所の会議室。三日目までの楽しい雰囲気とはどこか違う。「おまえら、いつまでもお客さんと思うなよ」と先輩のドスのきいた声。やっばり。昨日まではあんなに優しくかったのに……。

勧誘時は「練習は昼休みの四十分だけ。楽勝」と聞かされていた。しかし、先輩方は鬼の形相。気力、体力の限界に挑む。一回生は先に気力が萎える。そんな奴には容赦ない罵声の雨あられ。殺気立った体育館前広場は修羅場と化す。「四年間、最後までやります」と高らかに宣言してしまった我を悔やむ。

「押忍」、「失礼します」、「ごっつあんです」という数少ない言葉を連発しつつ、わけのわからぬまま歩いて行く。厳しい練習、指導の代償なのか、毎日飯をおごって頂く。「アメ」と「ムチ」。でも、「ムチ」の割合が圧倒的に多いと思うのは気のせいなのか。

さらに連帯責任という「足かせ」に苦しめられる。一方で、同輩間の連帯意識は強固になる。アイコンタクトだけで互いの気持ちかわかる。それが先輩に問い詰められた時に役立つ。同輩との話題は決まって、「早く幹部

になりたい」、「俺が幹部になったら……」。

六月、約二週間に及ぶ演武会合宿が始まる。後援会館二階の大部屋。早朝五時、目覚ましの音とともに、「起床!」の声で飛び起きざまに布団をたたみ、階段を駆け下りる。小倉城までランニング。到着後、「基本」、腕立て、腹筋とフルコース。量も大盛り。終わる頃は虫の息。現地解散。一回生は走って帰って、生協食堂で朝食の準備。そして、昼練、夜練と続く。後援会館に帰るのは十時前。「三日で死んでしまう」。真剣に思う。寝床に就く度、「もう、このまま夜が明けなくて欲しい」と願う日々。無情にも夜は明ける。今日も生きていく。生きる「喜び」と「苦しみ」を同時に噛み締める。

あれよ、あれよと演武会、インカレ、連盟祭も終了。幹部交代で二回生へ昇進。「幹部になりたい、なりたい」と願った日々。なってみれば、団を預かるという大きな重圧。一回生のがむしらかな時代が羨ましく思える。卒業して十三年、今でも応援団の夢を見るでも、なぜか一回生のまま。せめて幹部にして欲しい。

押忍



第31代目幹部披露宴(昭和63年9月18日)



### 第33代

## 三十三代目の思い出

第三十五代 阪上 壮一郎

三十三代目は福田浩文先輩ただ一人。同輩はいない。たった一人でよく頑張られたと思う。しかも、最後まで陸上部と兼部で。

我々三十五代目は団員数が多かったが、それでも一回生、二回生の頃は、毎日の団室掃除やお茶、おしぼりの交換、週末の先輩のジャージ洗濯などの雑用に負担を感じ、しばしばすっぱかしては怒られたものである。福田先輩が一回生のころは、たった一人でどうやってこなしていたのだろうか、と不思議に思ったものだ。

我々が入団したときには、先輩は親衛隊で、幹部以外の応援団員がつめているサークル会館会議室の主であったが、先輩は堅苦しいのが嫌いな方で、緊張しがちな我々一回生のことを気にかけて、「学ラン脱いで楽にしとけよ」と、いつも優しい言葉をかけてくれた。また、マイカーをお持ちだったので、遠征の際は、幹部の運転する車に乗って緊張を強いられるのを避けたいがため、皆我先に福田先輩のマイカーに乗ろうとしたものだ。

我々後輩には優しい先輩であったが、下積み時代に苦勞されただけあって、応援団員の

心得、しきたり、作法などは完璧であり、何を聞いても即座に迷いなく答えられ、「さすが親衛隊は違うな」と感じていた。

先輩が団長であった一年間、我々は二回生で、親衛隊としてコンパや他大学について行ったり、持ち演武をもらったり、後輩を持つたりと、初めてのことが多く、応援団としての楽しさ、充実感を味わえた一年であった。

忘れられない思い出は演武会である。先輩は体調が悪いことを全く表に出さず、日々の演武練習を欠かさず行い、特に「烈火の拍手」は、イジメではないかと思えるほど長々と引張って、我々団員を難渋させた。

その甲斐あって演武会は盛会のうちに幕を閉じ、連盟の飲み会も無事終えたが、翌朝先輩は緊急入院されたのである。そのとき我々は、三十三代目をたった一人で守り抜いた先輩の意志の強さを、まざまざと思い知らされた。

そんな先輩は、引退されるとバツタリ団活動には顔を出さなくなったが、何か月ぶりかで会議室にひょっこり現れたときは、以前とは見違えるほど肥えていた。我々後輩は皆、「ああ、この方もようやく解放されたのだろうな……」とうなずき合った。

### 第34代

## 応援団の思い出

団長 音成 道彦

第三十四代目幹部は、団長・音成道彦と副団長兼親衛隊長・林圭介の二名でした。

私の持ち演武は、二回生の時が「北九マーチ」、「北九手拍子（若い力）」、三回生（親衛隊）の時が「第二応援歌」、「ソング・オブ・ザ・ネイビー」でした。林氏は、二回生の時が鼓手、三回生（親衛隊）の時が「第一応援歌」、「北九節」でした。

本来、「北九マーチ」は親衛隊が担当する演武でしたが、三十三代目が福田浩文先輩お一人だったので、二回生から私がリーダーを任されることとなりました。

リーダーをとるということは、非常に名誉なことであると同時に、その責任も大きく、精神的にも体力的にも辛かったことを思い出します。しかしながら、リーダーをとるといふ喜びは何物にも代え難く、日々の練習は充実したものでした。

また、同期二人が、鼓手とリーダーとで競い合い、互いに切磋琢磨しました。林氏は手首が強く、連打の回転の良さと音の強さに目を見張るものがありました。

三回生になると、二人とも親衛隊ながらに

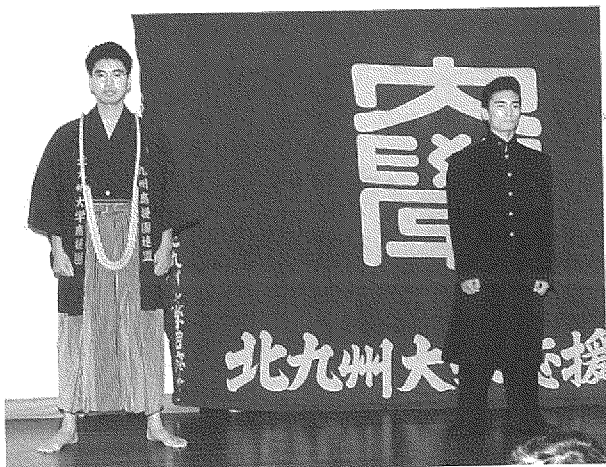
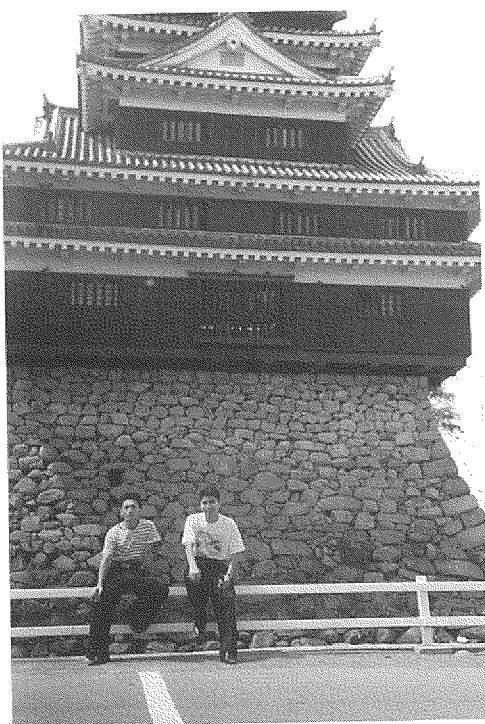
幹部の演武を任せていただけようになり

ました。本来ならば、下級生が幹部の演武を行うのは、体育会コンパでの「道遥歌」のみしか許されませんでした。特に演武会では、団長が行う演武が限られたものとなるので、多くの演武のリーダーをとらせていただくことができました。

大学卒業後、私は、北九州市立大学大学院経営学研究科修士課程、福岡大学大学院体育学研究科修士課程、九州大学大学院生物資源環境科学府生物機能科学専攻博士課程へ進学し博士号を取得、現在は株式会社健康科学研究所に勤務しています。

林氏は、長崎県教員採用試験に合格し、国語科の教員として長崎工業高校定時制、豊玉高校を歴任し、現在は長崎西高校に勤務しています。

私たちの代の前後は、団員数の減少が著しく、応援団にとって、まさに冬の時代でした。そのような我々を暖かく見守ってくださったOB会の先輩方や体育会の皆様に心から感謝申し上げます。



第34代目幹部披露宴



第33代目幹部披露宴（平成2年10月6日）

応援団への思い

団長 阪上 壮一郎

忘れもしない、入学式前の雨の夜、身分を隠した応援団の先輩に連れられ、迂闊にも団室に足を踏み入れた瞬間、自分の人生は変わった。それからの四年間は、自由気ままな学生生活を夢見ていた自分の予想と、全く反するものとなった。

本来、繊細で大人しく、応援団などとは縁もゆかりもない自分が、入団した以上、否が応でも人前に立ち、大声を張り上げなければならなくなったのである。劇的变化であり、異文化体験であった。おかげで思い出に残る大学時代を過ごすことが出来た。もし応援団に入っていなければ、今自分はどんな人間になり、何をやっているのか、想像出来ないくらいである。

一番懐かしい思い出は、やはり入団してから演武会に到るまでの三カ月間である。最初はお客さん扱い、それが一転して厳しい練習、教育の日々、挨拶やしきたり、七つ道具、団旗・太鼓の取り扱い、演武、歌を短期間に集中してたたき込まれた。

毎日を必死に乗り越える日々であったが、今振り返ってみれば、一回生最初のあの期間

が、人間的に皮むけた時期であり、懐かしく思い出される。

さて、応援団活動を振り返ってみると、応援団を通じて学ぶことは多々あり、個人としては成長することが出来たが、応援団という組織を成長させることは出来なかったと反省している。

自分たちは、先輩方がやってきたとおりによればよいものと思っていた。自分たちが試みたことといえば、団員数が年々減っていくのに対し、新入生獲得のため、一時的に規律を緩めたことくらいが精々であった。

時代が変わる中、全学生のリーダーであり続けるためにはどうあるべきか、厳しく考えたことがなかった。自分の卒業後に新しく出来たチアリーダー部は一貫して人数を確保しているのに対し、伝統ある応援団は一貫して極めて厳しい状況にあるのは、これが根本的原因ではないかと思う。

応援団にはこれからも、声が大きく、礼節を重んじ、なおかつ多くの学生にウケる、難しいことだが、そんな男らしい集団であって欲しい。だから現役たちには、自分たちの鍛錬と同時に、応援団そのものを成長させるためにも頑張ってもらいたいし、我々OBも「現役たちの応援団」として激励を続けていかなければならないと思っている。

チアリーダー誕生

団長 森高 陽一

私たちの代は、団員六人からのスタートでした。六人といえば、バックに一人か二人の人数しか充てることが出来ません。演武はバックの人数が少ないと迫力を欠きます。そのため、多くの新入生に入団してもらおうよう勧誘するのですが、芳しい結果にならないのは、例年の経験から予想の出来ることでした。

そのため、バックに立つ人間は男子団員に限らずチアリーダーでも構わない、むしろ華のある、見栄えの良い演武になるのではないかとこの結論になり、この年の新入生勧誘の方針は、男子学生と同等かそれ以上に、チアリーダー創設のための女子学生勧誘に力を注ぎました。

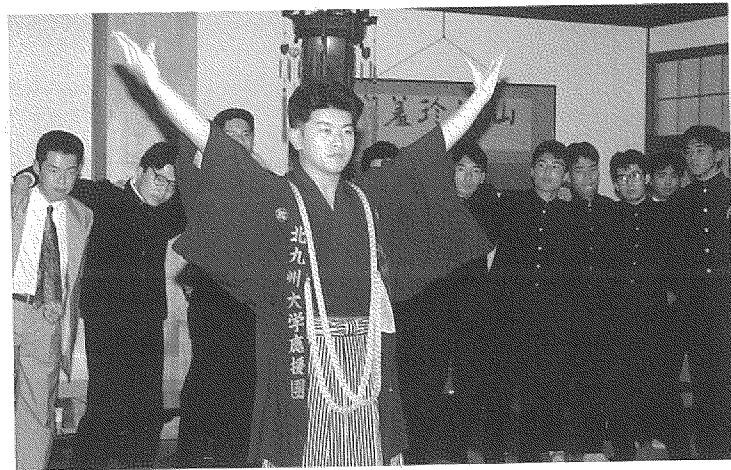
当初、チアリーダーという華やかなイメージを前面に出せば、女子学生の獲得は容易であろうと考えていました。確かに興味を示してくれる女子学生はある程度いましたが、まだ存在しないチアリーダーという団体の最初の一人になるということには、みんな抵抗感があるようでした。

考えてみればそれは当然のことで、私たち団員にチアリーダーを指導できる知識は皆無

であり、チアリーダーという組織が生まれた後、どう発展させていくかなどといった長期的な視野はなく、とにかく人数を揃えたいということだけでした。後々まで続くチアリーダーにしてみせる、と決意したのは、最初に豊福さんに入団してもらった後だったと思います。

最終的には、チアリーダー六人が入団してくれた一方、男子団員は一人と寂しい結果になりました。しかし、その時入団した田中君は、最後まで応援団員として頑張ってくれました。

現在もチアリーダーが存続していることを考えれば、応援団五十年の歴史の中で、当時の団員たちは一定の役割を果たしたと自負する一方、リーダー部の団員不足に拍車がかかったのはこの頃からだったと、当時の責任者として反省もしています。



第36代日幹部披露宴



諸先輩に支えられて

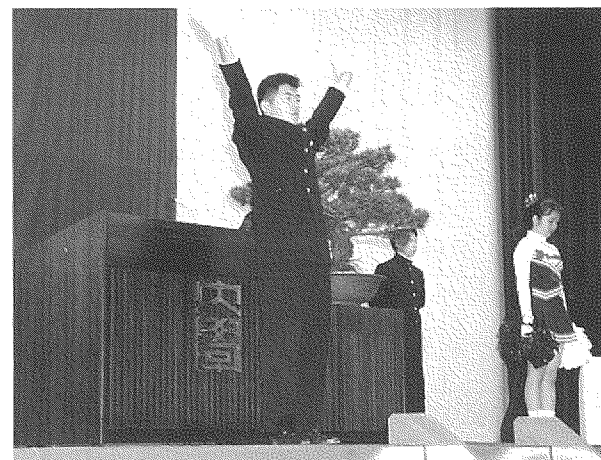
回長 水野 維大

我々が現役の頃は、ちょうど変革が始まった時期のようです。変革という聞こえは良いのですが、要するに団員の数が減り始めた時期なのです。もし大人数の団員が確保できていれば、昔と変わらない活動をしていただろう。

しかし、私たちは人数が少ないなりに、それまでとは少し違った形で存在感を出したいと考えました。その中でも大きな変化といえば、なんといっても二回生の時チアリーダー部ができたことです。活動の幅が広がり、それまでにはなかった華やかさをもたらしてくれました。

そして、私自身の中で大きかったことは、三回生の時、一つ上の代が不在だったので幹部をやったことです。

活動は緊張の連続でした。会議などの集まりでは、周りは先輩ばかりでしたので、普通のことでも緊張感がありました。体育会の活動の中でも先輩方に混じって幹部として活動したわけですが、体育会の皆さんが非常に温かく気遣ってくれたことに対しては、今でも感謝の念が絶えません。



入学式にて新生にエール

また、若輩ではありませんでしたが、伝統を守り存在感のある応援団でありたいという強い意志もありましたし、自分でもやっていける自信がありました。

新入団員を三名確保し、演武会も開きました。しかし、理想と自分の価値観を重視し過ぎたため足元が見えていませんでした。せっかく入った新生が、全員辞めてしまったのです。非常に強いショックを受けました。それまでの自信や価値観が一気に崩れてしまうくらいのショックでした。

自分の未熟さを痛感し、辛い時間を過ごし

冷静と情熱の間

回長 水野 維大

三回生で幹部を務め、四回生の時も引き続き幹部として活動したわけですが、精神的に成長したのかそれとも慣れただけなのか、見えてくる景色がそれまでと少し変わりました。

やりたいこと、やらねばならないことが落ち着いてのみに込めていたように思います。団員は相変わらず少なかったのですが、気持ち的に余裕ができ、三回生の時よりも楽しい時間が過ごせたと思います。

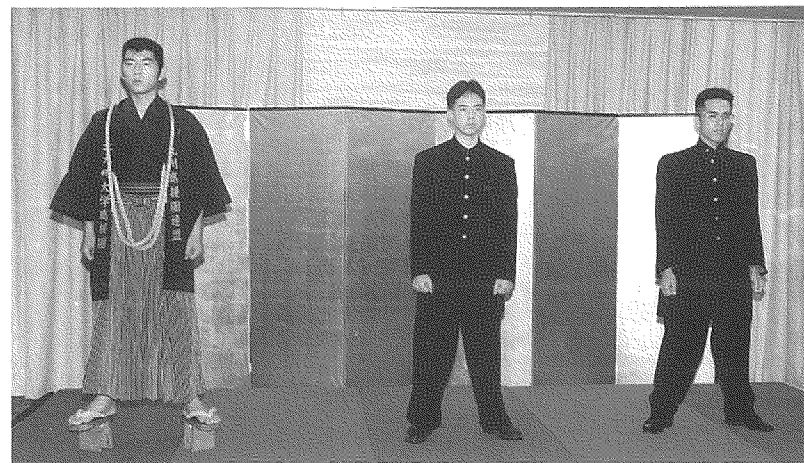
幹部として、応援団のあり方は常に考えていました。「応援団存続」というテーマは、入団から退団まで、ずっとついて回りました。あくまでも伝統を貫き、もしそれが受け入れられないとしたら消滅してしまったとしても仕方ないことなのだろうか、いや伝統に縛られ過ぎず少しづつ形を変えて生まれ変わっていくのが自然なのだろうか、と自問自答の日々でした。

そんな中、どうしても気になったのが応援の仕方です。試合の状況や観客の様子などお構いなく、ひたすら応援団の都合で進めているように、私には映りました。そこで、我々の代では、一般の観客が楽しめるように考え

実行してみました。もっとこうしたら、やはりこうしよう、という主体的な意識で活動することは非常に有意義でした。

応援合戦やその他演武披露の機会があった際には、プラスバンドの演奏が入ったマーチ系の演武を積極的に使用するようにしました。チアリーダーとのマッチングやその場の状況を考え、応援される人や見ている人の気分を高揚させるように意識しました。

大学の看板であるという誇りを持ちながらも、自己満足に陥らず、相手のことを考えた行動をするよう努力することこそ応援団の存在意義がある、と私は考えます。応援団に携わった人がそれぞれ、「応援団とは」という考えを持っていると思います。現在は、け



第37代目幹部披露宴

ましたが、その後、自分自身の行動を客観的に見られるようになりました。

卒業して六年経ちますが、いまだ辛いことの方が多く思い出します。しかし、応援団で経験した様々なことは、私の人生の中で、自分自身の考えに大きな影響（多くは良い影響）を与え続けています。

つして応援団にとって追い風が吹いている状況とは言えないでしょう。しかし、だからこそ自由な発想で、それぞれの「応援団とは」という思いを活動の中で発揮していくことが重要だと思えます。

我々の代の三人は、気軽に大学に赴くことはできませんが、今後も応援団が楽しく存続していくことを祈っております。



### 感謝された日々

団長 田中 芳徳

押忍 三十九代目の田中芳徳です。この代を代表して今回の五十年史に寄稿させて頂きました。と言っても、当時は、同年代が私人しかいなかったのですが……。

ただ、私が入団した年にチアリーダーが発足したため、女性の同期は五人ほどいました。美人ぞろいの女性軍だったため、つらい練習でも辞めずに最後まで頑張れたのかなと思います（コンパの依頼をよく受けていたので、断るのが大変でした、本当に）。三年ほど前、演武会に出席させて頂きましたが、その伝統は今でも変わらないのかなと感じました。

私自身の四年間の思い出というと、当時は九割苦しくて残り一割ぐらいしか楽しいことなかったのですが、今はすべてがいい思い出になり、すべて楽しかったように思います。数少ない良かったことといえば、各サークルの応援に行くと、どこでも感謝してくれたことです。試合に勝つたならいいのですが、負けても「来てくれて有り難う」と言われた時には、今までの練習のきつさがすべて報われたようでした。人に感謝される機会は社会人になると少なくなりましたが、誰かのため

に何かをやるということを一番経験できたのが、この学生時代だったと思います。

また、自分が団長だった時の最後の応援合戦（対九国大戦）は特に印象に残っています。試合には惜しくも負けたのですが、最後のエール交換の時、千人ほどの観客が静まりかえり、その中でのエールはすべての視線を一身に浴びたように感じられ、これだけ注目されるのは、後にも先にもこれが最後だと思えました。多分その時が、今まで生きてきた中で一番輝いていたのではないかと感じることもあります。

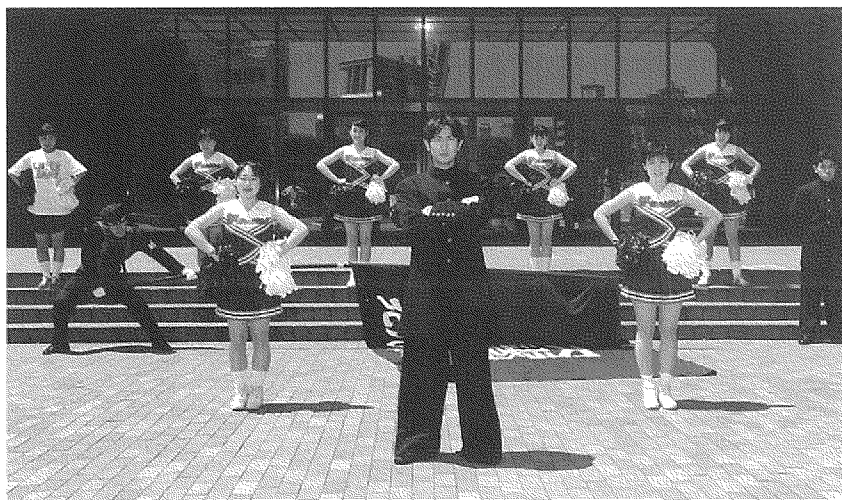
入団した当時、私一人だったということもあり、数多くの先輩から、よく呑みに連れて行ってもらいました。おかげで非常にお酒が好きになり、今では、会社の中では酒豪で通っています（笑）。また、団長だった時には、下級生が三人しかおらず、団員を増やせなかったことについて諸先輩、下級生に対して申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

近況としては、チアリーダーについては同期の上野さんが寄稿することなので控えて頂きます。私は現在大阪におり、貿易の仕事をしています。今の会社に入社して七年目になり、小さな会社ですが部下も付くようになりました。転勤も二回ほどし、つらい時期もありましたが、今でも頑張っている

られるのは、応援団の時に培われた根性と気迫のおかげだと思います。

応援団の行事などになかなか参加できないのが残念ですが、参加できる機会を得て諸先輩方、後輩諸君にお会いできることを楽しみにしています。

押忍



### 応援団の頃を思い、今、背を正す

団長 入江 誠

“dog year” 目まぐるしく変わる社会情勢。あまりのスピードに、時代はどのように変えられた。近年は“cat year”とも。とにかく早く結果の出るものが好まれた。鳴かない動物がもて囃された。そして応援団に入る人間は、少なかった。我々が先代、田中芳徳先輩よりその任を引き継いだ、平成九年の話である。

第四十代目応援団幹部は次のとおり。

野村恵造、岩村能典（就任後、間もなく退団）、村上菜穂子、秦沙織、穂山朋世、入江 誠

我々四十代目は、応援団が主役たり得る演武会を開催することができなかった過去をもつ。しかしながら、それは決して暗い過去ではない。なぜなら我々は、運動部を応援する行為の本質を掴む機会に恵まれたからである。以下には、その間の代表的な出来事と、それに纏わるエピソードを書きとめる。

●チアリーダー部「WARRIORS」が「第五回九州チアリーダーディング選手権大会」で見事四位入賞

平成十年八月十六日、福岡市民体育館において、私はこの快挙を目の当たりにした。体

が震えていたことを記憶している。

快拳の背景に触れる。チームの人員構成比率で主を成していた先輩チアリーダーの卒業と同時に、残された「WARRIORS」は部員不足の危機に陥る。日々の練習もままならず、新入生の獲得状況によつては選手権への出場も叶わなかった。言わばゼロの状態からの四位入賞。私は、短期間でのチーム作りで成功した彼女たちに、最大の敬意を払う。

●九州学生駅伝対校選手権大会（雲仙・島原）応援

平成十年十一月二十九日開催。島原地域再生計画（がまだず計画）の一環として、前年までの阿蘇地域から雲仙・島原地域へと開催



場所が移された。

駅伝応援における場所（区間）移動の難しさは競技コース回避の原則に起因するが、我々は前日からの綿密な下見により「全区間応援」を成し遂げた。我々が唯一。島原の広域農道を自家用車で疾駆する姿を、今でも思い起こす。

最後に、九州陸上連盟（主催）のオファーを受け、開催式において校歌、第一応援歌の演武を披露したことも記しておく。 押忍



# 「共犯者」へ

団長 入江 誠

「福岡ドーム応援ツアー開催！」。体育館前で白看板が輝く。速目からも解る「右上がりの墨字」。副団長・野村恵造の仕業である。

平成十一年春、応援活動の本質を探していた我々四十一代目応援団は、答えの一つを形に表した。

幹部メンバーは次のとおり。

野村恵造（四十代親衛隊長から四十一代副団長へ）、緒方奈央（「WARRIORS」キャプテン）、入江誠

平成十年十二月一日発足。以下には、就任期間中の活動内容を挙げる。

- 「福岡ドーム応援ツアー開催」

平成十一年四月十一日、九州六大学野球春季リーグ開幕戦（対九州大学）が福岡ドームで行われることとなった。それに合わせ、我々は貸切バスを二台調達する応援ツアーを企画した（体育会総務協賛）。反響の良さは想像を遙かに超え、結果として体育会からの参加者を調整（減）するに至る。

福岡ドームまでの道中、一般参加者を多く含むバスの中は、校歌やコールを練習する場所へと変わった。試合結果は四一〇の勝利。

硬式野球部の開幕ダッシュを後押しするという主題、新入生をターゲットとした応援団の認知度アップという副題はそれぞれ満たされた。また、硬式野球部が同リーグをAクラス（三位）で終了したことを書き留めておく。九年来の快挙であった。

- 「KKU」ロゴ入りメガホンの新調と応援ステージ台の作成

「気軽に応援活動へ参加できる環境整備」の一環として、校名の略字「KKU」をあしらったメガホン（青・白）を新調。

また、北九州市民球場仕様の応援ステージ台（木製）を作成した。寸法取りから防水加工までの全てを副団長・野村恵造が手掛ける。複数枚のパネルから成る当該ステージは、一枚一枚の脱着が容易で、連結による拡張も可能。柔軟かつ緻密な設計は、製作者の性格を大いに反映している。

- 「WARRIORS」キャプテン緒方奈央リーダーシップの持ち主である。同回生不在の状況を苦にせず、チームを運営した。また、彼女はチアリーダー部の活動内容に、競技チアリーディングと応援活動への参加が共存出来ることを体現した。

応援団全体の組織運営について膝を突き合わせ語り合った彼女は、前述の野村同様、愛すべき共犯者の一人である。

押忍

# 第四十二代の活動報告

団長 本城 顕太郎

「原点に戻る」。これが第四十二代の一年間でありました。

応援団活動の最も核となるべきものは何か……応援活動そのものである。

当時は、団内の規律や演武に固執するあまり、本業であるはずの応援活動が疎かになる傾向がありました。応援合戦などでも、団の自己満足で終わってしまう。本来のあるべき姿を意識し、活動を進めました。

一年間通して掲げた目標は二つ。一つは、応援活動そのものに徹底的にこだわること。もう一つは、他学生団体との連携の強化です。

まず、九州地区だけでなく、文書のみで交流で留まっていた関東・関西の大学応援団と意見交換して交流を深め、いいものを創り上げていきました。

応援における応援団の使命とは、応援団の力で勝利に導くのと同じく、応援に来てくれた学生の「応援する気持ち」、「勝ちたい気持ち」を引き出し、選手に届けることです。演武の美しさやテクニクは、それらを引き出すツールにすぎません。大切なのは気持ちなのです。

そして、学内諸団体、特に体育会との連携を強化。同学年の第四十四代体育会会長・福万君とは、どうすれば応援が、応援団が、体育会が盛り上がるか、学生から求められるものは何かなど、夜遅くまで議論を重ねました。彼には、この場を借りてお礼申し上げます。

その甲斐あってか、対九州国際大応援合戦では、数十年ぶりに二連勝。勝利に貢献でき、大変うれしく思いました。

チアリーダー部は、チアリーディング競技を第一に活動しました。もちろん応援活動を疎かにはしませんが、競技選手として、大学の看板を背負って出場するのです。残念ながら大会の結果こそ伴わなかったものの、例年以上のすばらしい演技を披露してくれました。



第7回九州チアリーディング選手権大会

一年間通して様々な活動を行いました。いちばん思い出深いのは秋季九六リーグ最終戦、対西南学院大戦です。当時、応援団は北九州大学と西南学院大学の二校のみ。双方の応援団、チアが全員集合し、最初で最後のエール交換。応援も両校とも大変に盛り上がり、私の集大成でした。

応援団として最も重要な「応援」にこだわったという意味においては、他代に負けないうすばらしい一年であったと自負しております。



平成11年度九州六大学野球秋季リーグ全日程を終えて（北九州市八幡東区・大谷球場）

確かな手応え

副団長 竹森 崇

平成十二年十一月にスタートした四十三代は、当時応援団に三回生が不在であったため二回生団員が幹部となり、応援団員四名、チアリーダー部員七名という体制での発足であった。

四十三代目団長に就任した松尾は、北九州市立大学応援団初となる女性応援団長であり、学内は無論、学外からも注目を集め、幹部披露宴前より新聞、ニュースなど各種メディア取材が続き、大きな話題となった。

四十三代の基本方針は、死活問題である団員・部員の確保と、野球のみにとられない幅広い応援活動の展開であった。

四月、学校側との協議によって入学式でのアトラクションを企画、新入生に応援団、チアリーダー部をアピールすることにより、団員三名、チアリーダー部員二名が入部した。

また、同月、北九州大学が北九州市立大学へ校名変更を行うと、これに合わせて北九州大学応援団も北九州市立大学応援団に名を改め、幹部バッジ、大団旗などを新調、篠崎八幡宮において新大団旗の入魂式を執り行った。十月、夏季より八幡東区で開催されていた



平成12年秋の応援合戦



北九州市の祭典・北九州博覧祭の「北九州市立大学の日」にステージ出演。十一月には、九州大学学園祭において、同大学応援団の復活を九州学生応援団連盟で協議し、西南大、熊本学園大、下関市立大と共に四大学応援団合同演武会を開催した。

一年間、様々な行事、イベントを経験し、若輩ながらも確かな手ごたえを掴んだ四十三代は、二年間の幹部在任期間を活かし、翌年

に控えた創団四十五周年に合わせ、長らく途絶えていた演武会の復活を目指すようになった。歴代幹部の中でも、初の女性応援団長就任で注目を集めた四十三代であったが、松尾団長の統率力、行動力こそが、北九州市立大学応援団の中興を担い、あとに続く四十四代での演武会開催の原動力となった。環境が人を作り、人が環境を創る。

さらなる飛躍を目指して

団長 松尾 聡子

平成十三年十一月、応援団については、団長・松尾、副団長・竹森が継承して第四十四代目幹部に就任し、チアリーダー部については、三回生の平野、市川、金崎から、二回生の西田、奥苑依里子、奥苑佳子へと交替し、団員八名、チアリーダー部員九名で新たなスタートを切った。

四十四代目においては、前代に引き続き応援活動の場を広げるとい目標と、八年間途絶えていた演武会を復活させるという温故知新の精神を礎に、様々な試みを行った。

応援活動では、九州六大学野球春季リーグ初の巴戦となり、大学を挙げての応援を行い、惜しくも優勝は逃したものの、体育会以外の学生にも広く応援活動を知ってもらう良い機会となった。

また、野球部以外のサークル応援など、精力的に応援活動を行うことができ、様々な応援スタイルの発展へとつながっていった。

九月には、兼ねてからの目標であった演武会を門司文化センターで執り行い、伝統演武の復活と同時に、チアリーダー部との協力により、野球応援の再現やステージなど、応援

団の新しい形を披露することができ、新たな伝統への第一歩を踏み出した。

演武会開催にあたりご指導下さった諸先輩方、ご支援頂いた関係各位に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

演武会は小規模ながらも成功を収めたが、創団四十五周年を迎えた北九州市立大学応援団にとっては、復活への小さな第一歩でしかなく、益々の発展に向けて課題を残す結果となった。

しかし、四十五周年という節目の年に応援団幹部として活動できたことは、大変光栄に感じている。



平成14年春の応援合戦



平成14年秋の応援合戦



第45代

四十五代を振り返って

団長 池田 好美

四十五代は、団長・池田、副団長・金子、チアリーダー部キャプテン・野田、副キャプテン・斉藤の四人の幹部の下、総勢十七名で活動しておりました。

四十五代就任当初、応援団の現状として、体育会各部との関係の希薄化、それに伴う応援活動の減少、また、応援形態の形骸化といった課題があるという認識がありました。

そこで、改めて団則、団訓を体現する応援団を作ろうという目標の下、他部イベントの応援(参加)、新しい応援形態、ダンスの作成を行い、応援の向上、幅を広げることに対して意欲的に取り組みました。しかしながら、中には結果が出せなかったり、失敗したりしたものもあり、課題をそのまま残してしまっただけのものもありました。

それらの取り組みの中の一つが演武会です。演武会は、前代において数年ぶりに開催されたのですが、ほかにまず解決すべき問題が山積している現状で、演武会を開催すべきかどうか悩みました。しかし、演武会を学内の講堂で開催することにより、より多くの人たちに足を運んでもらって応援団をより深く知



大谷球場にて



っていたとき、結果、それが中長期的には応援団の活動の幅を広げるのではないかと考え、開催しました。

演武の復活、太鼓の技術向上などに加え、会場を講堂にしたため、音響、照明などの問題も解決せねばなりませんでした。いくつかの応援活動を犠牲にせねばならなかったこともありましたが、しかしながら、多くの先輩方

や関係者の方々の協力を得ながら演武会を無事開催できたことは、皆の自信になったと思いますし、逆に、今の応援団が抱える問題点、改善点がより一層認識できたと思います。

総じて、四十五代時点での北九大応援団は問題点を多く含み、解決できなかったものもありますが、常に問題と向き合い、革新を図る気があったと思います。

第46代

感謝

団長 亀谷 忠史

平成十五年十一月、団長・亀谷忠史、副団長・松村庸平、チアリーダーではキャプテンに松川香菜子、副キャプテンに渡邊憲子が就任し、北九州市立大学応援団第四十六代目の活動が始まった。

陸上部の島原駅伝参加を一週間後に控えた慌しいスタートを切り、紆余曲折を経て迎えた新学期。チアリーダーは、過去に例を見ないほど多くの部員を迎えることができた。

そして、特筆すべきは、やはり三十九年ぶりに迎えた神宮出場であろう。自分自身、過去に軟式野球部全国大会出場という経験は持っていたが、学校全体が大きく関与するほどの騒ぎにはならなかった。

学長先生を始め学校関係者の皆様への挨拶や、後援会、同窓会への助成のお願いなど、春季リーグ戦が終了してから神宮応援へと向かうまでの六月初旬は、まさに息つく暇もないような時期であったといえるだろう。

そして、迎えた神宮応援。一回戦の相手である創価大学を下し、我が北九大は二回戦へ進むという快挙を成し遂げた。もちろん憧れはあったにせよ、本当に神宮の土を踏むこと



神宮球場にて



ができればよいとは、思ってもみなかった。我々をそこまで連れて行ってくれた硬式野球部の皆さん、そして暖かい援助を下さった学校関係者の方々、野球部父母会の方々に心から御礼を申し上げます。

神宮のみならず、我々の活動は多くの人々に支えられてきた。今、こうして現役時代を振り返るにあたり、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。未熟な我々を支えていただき、誠にありがとうございました。

## チアリーダー部草創期

第三十九代目チア 上野 真実

平成六年四月、当時の応援団部長であり前学長の田中慎一郎先生のご尽力のもと、第三十六代目団長・森高先輩、初代チアキャプテンとなる石国真里によって北九州大学応援団チアリーダー部が結成されました。

チアリーダーイングに対する一つのスポーツとしての認識が薄いということ、団結、礼儀、規律を重んじる応援団と一緒に活動することに抵抗を感じる人が多い中、キャプテン石国の声かけによって、彼女を含む五人が入部しました。チア経験者は、ハワイからの帰国子女・石国ただ一人。それでも、有り余る元気の良さで毎日の練習に取り組みました。少ない人数ながらも、なんとか活動を軌道に乗せることができたのは、「チアリーダーイング」を知る石国がいてくれたからだと思えます。彼女なしではチアを存続させることは困難であった、と言っても異議を唱えるメンバーはいないでしょう。

チア、サイドライン、ダンスといった演技として「魅せる」ための技術の面でも、チアリーダーとしてアスリートたちを「応援する」ということの意義、その精神の面でも、

他のメンバーがこれらを抵抗なく理解、実行することができたのは、石国が中心となって私たちを支えてくれたからだと思えます。

見た目には華やかなチアリーダーイングでも、実際は皆、ありとあらゆるところに青アザをつくり、それでも笑顔で練習していました。精神的にも肉体的にも、みんな相当タフに鍛えられたのではないのでしょうか。簡単なようで実はとても難しい、「相手を信じる」ことがクリアできなければ、続けられなかったと思います。それぞれ留学の夢や勉強との両立に苦労し、途中メンバーが何人か入れ替わりながら、それでもなんとか六、七人の部員をキープしつつ、学校行事や大会、合宿などにも意欲的に参加しました。

チア初期のメンバーで現在の基盤をつくったという誇りはありませんが、四年間活動を続けたことで培った「応援団チアリーダー部」部員としての誇りは、今でも私たちの活力を支えてくれているように感じます。応援団の五十年という重みには到底かないませんが、これからの後輩たちにも、応援団と一緒に活動を行いながら、チアの歴史を添えていただけたらと思います。そして、同じように誇りを感じていただけたら、と思います。技を競うだけでなく、みんなに「元氣(チア)」を伝えられるように、応援団と一丸と



なって歴史を重ねていってください。最後に、チアOGの近況報告を簡単に。日本では、熊本、福岡、神奈川、広島、大阪に散らばったメンバー。仕事に精を出し頑張っている者もいれば、結婚してママとして奮闘中の者もいます。

海外では、ハワイ在住・石国が結婚したとか。めでたいことです！オーストラリア・ケアンズ沖グリーン島でホテルのスタッフとして働く豊福も頑張ってますよ。

ちなみに、私は現在北九州在住、不動産の仕事をしております。皆様、不動産のことならなんでもお気軽にご相談くださいませ。姓も近々変わる予定です！チアで培った根性で、これからの人生を大いに楽しみ、何事も乗り越えていきたいと思います。



上：創部2年目メンバー／中左：6年目メンバー／中右：4年目メンバー／下：9年目メンバー

